


 翻 訳

『匿名のガル年代記』第三卷（翻訳と注釈）

[第13章から第26章（終章）まで]

荒 木 勝

以下の翻訳は、写本ザモイスキ版、センジヴォヤ版、ヘイルスベルスキ版を検討したカロール・マレチンスキ K. Maleczyński の校訂本を用いた (Galli Anonymi Cronicae et Gesta Ducum sive Principum Polonorum [Monumenta Poloniae Historica, Nova series, Tomus II, Cracoviae 1952])。

注釈に関しては、ビェロフスキ (A. Bielowski)、マチレンスキ、プレジア (M. Plezia)、グロデツキ (R. Grodecki)、ブイノッホ (J. Bujnoch)、シラフトフスキ・ケプケ (I. Szlachtowski, R. Koepke) に拠った。注釈においては、注釈者の見解をそれぞれに

Bielowski → [Bi]、Plezia → [P]、Grodecki → [G]、Bujnoch → [B]、Maleczyński → [M]、I. Szlachtowski, R. Koepke → [S]

と略記し、以下にその見解を紹介した。それ以外の注釈は訳者のものである。参照した翻訳は、グロデツキ訳をふまえたプレジアによるポーランド語訳 *Anonim tzw. Gall, Kronika Polska*, Kraków 1982 [BIBLIOTEKA NARODOWA, Nr. 59]。ブイノッホのドイツ語訳 *Polens Anfänge, Gallus Anonymus, Chronik und Taten der Herzöge und Fürsten von Polen*. Verlag Stria, Graz-Wien-Köln 1978 である。典拠については、聖書は、シュトゥットガルト版の *Biblia Sacra iuxta Vulgatam Versionem* 1969 (その翻訳は、とくにことわりがない限り、『合同訳聖書』日本聖書協会、1991年) に拠った。ギリシヤ・ラテンの古典については、*The Loeb Classical Library* に拠った。12～13世紀の東欧の年代記類については、*Monumenta Germaniae Historica, Scriptorum* に拠った。

第十三章 ポーランド公¹⁾ボレスワフへの皇帝の手紙

「皇帝なる我、ポーランド公に好意を表し、挨拶を送る。汝の勇気を知り、我が諸公の忠告に同意し、我、三百マルクを汝より受け取らば、平和のうちにこの地より立ち去らん。また同時に我等において和平と友好の絆が結ばれば、これにて我が名誉は保たれん。しかして、汝もしこれを拒まんとすれば、クラコフの町にて、すみやかに我を待ちうけることにならん。」

(13) EPISTOLA CESARIS AD DUCEM¹⁾ POLONICUM BOLEZLAUM

Cesar Boleslao duci Polonie gratiam et salutem. Tua probitate comperta, meorum principum consiliis acquiesco : et CCC marcas recipiens, hinc pacifice remeabo. : Hoc mihi satis sufficit ad honorem, : si pacem simul habuerimus et amorem. : Sin autem hoc tibi placuerit reprobare, : in sede cito Cracouiensi me poteris expectare. :

- 1) [P] 年代記作者は、ボレスワフ・クシヴウスティを一度も「王」とは呼んでいない。しかしザモイスキ版、センジヴォイ版、ヘイルスベルスキ版のいずれの写本も「王」Rex と書いている。それゆえ、写本での「王」は年代記の作者に依るものではないと思われる。

第十四章

一一九

これに対して、北の公は応えた¹⁾。「皇帝に対して、ポーランド公たる我、ボレスワフは確かに和平を結びたく思う。しかし、デナル金貨²⁾に希望を託してではない。まさしく、行くも帰るも汝等の皇帝の権限に属することである。しかし、脅迫か、あるいは一方的な条件によってでは、安価なオボル銭³⁾の一銭も汝は我がもとに見出すことはできないだろう。なぜなら、汚名のうち

に永く平和にポーランド王国を保持するよりは、今この時、確固たる自由のために、ポーランド王国を失う方がよいからだ。」⁴⁾

(14) RESCRIPTUM AD CESAREM

Ad hec dux septentrionalis¹⁾ remandavit : Cesari Bolezlauus dux Polonorum : pacem quidem, sed non in spe denariorum²⁾. : Vestre quidem cesaree potestati ire consistit vel redire, : sed apud me tamen pro timore vel condicione nec ullum poteris vilem obulum³⁾ invenire. : Malo enim ad horam regnum Polonie salva libertate perdere, : quam semper pacifice cum infamia retinere⁴⁾ :

- 1) [訳注] 第二卷第三九章の注(3)参照。
- 2) [P] 古代ローマの貨幣で、中世においても、その名は流布していた。ここでは、オボル貨幣との対比においてより高価な貨幣単位を意味している。
- 3) [P] ギリシアの小銭。ここでは、一般に小銭の意味で用いられている。
- 4) [M] 以上の二つの手紙は、ガル自身によって作成されたものである。

第十五章

この回答を聞いた後、皇帝はヴロツワフの町に近づいたが、そこでは生者の代りに死者しか手に入れることができなかった¹⁾。皇帝はクラコフへ赴く振りをして、長い間あちこちと川の周囲を歩き回り、こうすることによってボレスワフに恐怖を与え、彼の心を変えることができるのではないかと考えたが、ボレスワフは全く態度を変えず、以前と同じ返事を使者に与えただけであった。それゆえ皇帝は、そこにこれ以上長く留まれば、名誉や戦果を得るよりも、むしろ損失と恥辱に身を晒すことになるかと悟り、貢納としては屍以外のものは何も運ばずに、帰還することを決意した。

皇帝は、以前は傲慢に大金を要求し、最後にはわずかな額しか望まなかったけれども、一デナルの金貨も手に入れることができなかった²⁾。傲慢な心を抱いてポーランドの古き自由を軛の下につなごうとしたが、正義の裁き主は³⁾、

この企てを虚しきものにされ⁴⁾、顧問官シフィエントポウクにおけるあれこれの不義不正を罰したもうた⁵⁾。

(15)

Hiis auditis cesar urbem Wratislaviensem adivit, : ubi nichil nisi de vivis mortuos acquisivit¹⁾ : § Cumque diucius ire se Cracow simulando, huc illucque circa fluvium circumviaret : et Bolezlauo sic terrorem incutere : eiusque animum revocare : cogitaret, : Bolezlaus ideo nichil omnino diffidebat, : nec aliud legatis, quam superius respondebat. : § Videns ergo cesar diu stando sibi pocius dampnum et dedecus quam honorem vel proficuum imminere, : disposui, pro tributo nichil portans, nisi cadavera, se redire. : Unde quia prius superbe magnam pecuniam requisivit, : ad extremum pauca querens, neque denarium acquisivit²⁾ : § Et quoniam superbe libertatem antiquam Polonie subigere cogitavit, : iustus iudex³⁾ illud consilium fatuavit⁴⁾ | et iniuriam in Suatopolc consiliarium et illam et aliam vindicavit. : ⁵⁾

- 1) [M] この戦闘は、カドゥベックがブシェポーレ Psie Pole (「犬の野」) において行われたと述べている戦と同一のものであるように思われる。カドゥベックは、この戦を詳細に描いているが、ガルにおいてはそれ程重視されていない。[訳注] カドゥベックの年代記の当該箇所は次のようである。“Superest argumento loci appellatio ; ad quem tanta canum confluxerat numerositas, qui tanto cadaverum esu in quamdam feritatem prorupere lymphaticam, ut nullis illo pateret commeatus. Ideoque caninum campestre locus ille nuncupatur.” (M. P. H. t. 2) 「この証拠として、場所の名前が今日まで残っている。すなわち、そこに無数の犬が集まり、非常に多くの屍を食べて狂気に陥ったので、誰も敢えてその場所を通ろうとする者がいなかった。そこからこの場所は『犬の野』と呼ばれている。」
- 2) [M] ガルは、皇帝はいかなる貢納も受け取らずに帰還した、と説明しているが、エッケハルトはこれを否定している (MGSS. IV 243)。
- 3) [M] Psalm, 7-12. “Deus iudex.” 『詩編』七一一二「正しく裁く神」。
- 4) [P] ヘイルスベルスキ版の写本では、この箇所に破損があり、そこに以下のような書き込み (クローマーの手による) がなされている。「なぜなら、皇帝は大きな辱めを負って自分の国に帰ったからである。他方、クシヴウステイというあだ名のボレスワフは皇帝ヘンリクとの間で行った戦の後、ボヘミア人、ボモジャ人、ルテニア人と戦を行い、輝かしい勝利を取めた。」“quia cesar cum satis copiosa confusione ad propria remeavit. Iste Boleslau congnominatus est Krzjzjwoustij, qui post bellum,

quod habuit cum Henrico cesare, postea cum Bohemis, Pomoranis et Ruthenis
multa bella prospere gessit, atque gloriosus triumphavit.”

- 5) 〔訳注〕シフィエントポウク——モラヴィア公。後にチェコ公（一一〇七——一〇九年）。第二卷の注（12）を参照。

第十六章 シフィエントポウクの死について

さて、たまたま我々は、シフィエントポウクについて思い起こすこととなったが、他の人々を匡正する縁^{よすが}として、彼の生涯と死について若干の言葉を費すことは、骨折りがいのあることでもあろう。

さて、シフィエントポウクは、もともとモラヴィアの世襲の公であったが¹⁾、大いなる野心を抱き、自分の君主ボジヴォイ²⁾からボヘミア公国を奪い取った。生れは高貴であり、性格は豪胆³⁾、騎士の業に秀いでいたが、信義に欠け⁴⁾、気質において狡猾なところがあった。というのは、シフィエントポウクの勧めによって皇帝はポーランドに侵入したが、シフィエントポウク自身は一度ならず、しばしばポレスワフに忠誠を誓い、ポレスワフと一つの盾で結ばれ⁵⁾、ポレスワフの勇気と助力でボヘミア王国を手に入れたからである。ブラハにおいてシフィエントポウクを即位させるために、ハンガリア王コロマンとともにモラヴィアに兵を進め⁶⁾、またハンガリア王が帰還した後も、ボヘミアの森に踏み入ったのもポレスワフではなかったか。もしボジヴォイが約束に従って、カミエニの砦⁷⁾をポレスワフに与えなかったならば、ポレスワフはそこから退くことはなかったであろう。さらにポレスワフは、ボヘミアから逃げてきた多くの者を自分のところに留め、扶持を与えたが、彼らはポレスワフ自らがボヘミア公になることを希望し、前もってポレスワフの恩顧を得ようと思っていたのである。実際、シフィエントポウクは、当時は小さな土地とわずかな財産しか持っていなかったからである。他方、シフィエントポウクはポレスワフに、次のような誓いを立てていた。「もしいつか、ある方法で、ある謀によって、自分がボヘミア公になったならば、私はいつもあなたの忠実な友となり、互いに一つの盾となろう。そして国境にある砦をポレスワフに返還するか、あるいは全くそれを打ち壊すことにしよう」と。しかし、公国を手に入れると⁸⁾、誓いを破り⁹⁾、約束を守らず、人殺しを犯して¹⁰⁾神を恐

れなかった¹¹⁾。それゆえ神は、他の人々に対する戒めとして、彼の業に相応しい償いを求めた¹²⁾。すなわち、ある時、彼が全く安心して武器を持たず、自分の兵士達のただ中でラバに乗っていた時、名もない一人の騎士の槍に刺し貫かれて倒れたのである¹³⁾。彼の家来の中でも誰一人彼の復讐のために手を挙げる者はいなかった。

さて、このようにして、皇帝は、ポーランドから凱旋し帰国したが、喜びの代りに悲しみを¹⁴⁾、貢納の代りに死者の屍を記念として持ち帰った。他方、ポーランド公ボレスワフは、皇帝が近くにいっても彼を恐れず、去った後ではなおいっそう皇帝を恐れることはなかった。

(16) DE MORTE SWANTOPOLC

Et quia forte Suantopolc ad memoriam revocamus, : opere precium est, ut aliquid de vita et morte ipsius ad correccionem aliorum inducamus. : Igitur Suatopolc dux Morauiesis hereditarie prius extitit¹⁾ : postea vero ducatum Bohemie Boriuoy²⁾ suo dominio plenus ambicione supplantavit : §genere quidem nobilis, natura ferox³⁾, militia strennuus, sed modice fidei⁴⁾ et ingenio versutus. : Huius enim consilio cesar Poloniam intravit, : qui Bolezlauo non semel sed frequenter iuraverat, : qui cum Bolezlao unum scutum coniunxerat⁵⁾ : qui virtute Bolezlai et auxilio regnum Bohemicum acquisierat. : §Numquid non Bolezlaus pro Suatopolc Prage ponendo cum rege Vngarorum Colummanno Morauiam intravit⁶⁾, : silvas, Bohemie rege redeunte penetravit. : Utique fecit. : §Nec sic inde remearet, : nisi Boriuoy castrum Kamencz⁷⁾ pro paccione sibi daret. : Insuper etiam Bolezlaus de Bohemia multos ad ipsum iam fugientes : preocupaturos gratiam, ipsum ducem fore sperantes, : et retinebat et pascebat, : quia Suatopolc parvam terram, paucasque diviitas tunc habebat. : E contra Suatopolc Bolezlao iuravit, quia si dux Bohemorum quocumque modo vel quocumque ingenio quandoque fieret, : semper fidus eius amicus unumque scutum utriusque persisteret, : castra de confinio regni vel Bolezlao redderet, : vel omnino destrueret. : §Sed ducatum adeptus⁸⁾ nec fidem⁹⁾ tenuit : iurata violando, : nec Deum timuit¹¹⁾ : homicidia perpetrando¹⁰⁾. : Unde Deus ad exemplum aliorum sibi dignam

profactis reconpensationem exhibuit¹²⁾; cum securus, inermis, in mula
residens in medio suorum ab uno vili milite venabulo perforatus
occubuit¹³⁾; nec ullus suorum ad eum vindicandum manus adhibuit. :
Taliter cesar de Polonia rediens triumphavit; videlicet luctum pro
gaudio¹⁴⁾; mortuorum cadavera pro tributo : memorialiter reportavit. :
Bolezlauus vero dux Polonorum parum presentem; sed minus absentem
: procul dubio dubitavit :

- 1) [B] シフィエントポウク——オルミッツのコンラッド公の息子。——〇七年五月から——〇九年九月二日の彼の暗殺の日までボヘミア公の位にあった。
- 2) [M] ボジヴォイ————〇〇年から——〇七年までボヘミア公の地位にあった。ヴラティスワフ王とズビスワヴァ（カジミエシ・オドノヴィチェールの娘）の子であったから、ボレスワフ・クシヴウステイの従兄弟にあたる。——〇七年五月にシフィエントポウクによって追放される。
- 3) [M] Sallust, *Bellum Catilinae*, 43-4. "Natura ferox, vehemens, manu promptus erat." サルスティウス『カティリナ戦記』四三—四「性は豪胆で激しく、行いに敏であった。」, *Bellum Catilinae*. 5-1~7. "L. Catilina nabili genere natus fuit,……animus ferox inopia rei familiaris."『カティリナ戦記』五——七「L・カティリナは、生れは高貴であったが……豪胆な性格は家産の貧しさによって……」
- 4) [M] Mattheus, 6-30. "Si autem faenum agri……quanto magis vos modicae fidei."『マタイによる福音書』六—三〇「野の草でさえ……信仰の薄き者よ。」
- 5) [P] "unum scutum"——ガルは、盾を表現する時は、他の箇所ではクリペウス "clipeus" という言葉を用いている。——「一つの盾のもとに結び合う」という表現は、中世において "scutum" という言葉が、同時に、騎士と彼の従者、よろい持ちからなる、部隊の最小の単位を意味しているという事から生じた。
- 6) [M] この出兵は、——〇五年の十月に行われた。その時シウィエントペウクは詐術を用いてブラハを占領した。Cosma III-19.
- 7) [M] ボヘミア公ブジェティスワフによって一〇九六年に、シロンクスに建てられた砦。おそらく——〇七年か——〇八年にボレスワフによって占領されたのであろう。Cosma III-4. [P] オボレ近郊の砦。第二卷の第三六章の注(10)参照。
- 8) [M] ——〇七年五月一四日。
- 9) [M] カミュニの砦は、——〇七年から——〇八年にかけて、おそらくポーランドのものであった。
- 10) [M] Exodus 22-3. "homicidium perpetravit et ipse morietur."『出エジプト記』二二—三「殺した人は自ら死なねばならない」（これは『ウルガータ聖書』の直訳である——訳者）
- 11) [M] Luc. 23-40. "neque tu times Deum."『ルカによる福音書』二三—四〇「お前は神をも恐れぬのか。」
- 12) [M] Hester, 16-23. "digmam pro fide recipere mercedem"『エステル記』一六一—二三「信仰に相応しい報いを受ける」（〔訳注〕『エステル記』のこの箇所は、ギリシャ語版『エステル記』として、『ウルガータ聖書』に収められており、「勅書」E—23の箇所に相当する。）

- 13) [訳注]『コスマの年代記』第三卷第二章によると、一一〇九年九月二一日に、ウルショフシ族のヤンの息子チェスタが差し向けた一人の騎士によって槍で殺された。また『ペガウ年代記』によれば、グロイチェ族の伯ヴィブレヒトによって殺害されたとされている (M. G. S. S. XVI. p. 250.)。
- 14) [M] Hester, 13-17. "converte luctum nostrum in gaudium."『エステル記』一三一一七「我らが民の悲しみを喜びに変えて下さい。」([訳注]『合同訳聖書』「エステル記」[ギリシャ語]のC-10の箇所に対応する。)

第十七章 ボヘミア人について

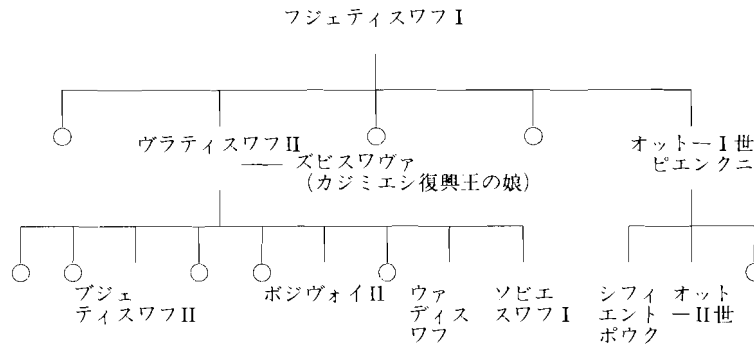
さて、非常に大きな困難を切り抜けた後、北の公は、しばらくの間休息を取ったが、ボヘミア人に対する攻撃をこれ以上延期することはなかった。というのは、ボヘミア人から蒙った自分への不義不正に報復し、自分の友人ボジヴォイを¹⁾、奪われた王座に再び即位させようと考えたからである。ところで、軍を進め、行く手を阻むボヘミア人と森の中で戦を交え²⁾、勝利を収めてボヘミアの野に軍勢の一部を宿営させていた時、すでにボヘミア人に受け入れられていたボジヴォイは³⁾ボレスワフに対して、自分への大きな信頼と自分のために払った大きな労苦に感謝の意を表した。こうして不屈のボレスワフは、二重の名譽を得てボヘミアから帰還した。範とすべきこのような勇気から、何か有益な果実を引き出すために、ボレスワフが帰ってから成し遂げた事柄に耳を傾けることにしよう。

(17) CAPITULUM DE BOHEMIS

一
一
三
Igitur post tantum laborem dux septentrionalis aliquantulum recreatus,
: super Bohemos equitare non diutius est retardatus. : Cogitabat enim et
suam iniuriam de Bohemis vindicare : et suum amicum Boriuoy¹⁾ in sede
supplantata restaurare. : § Dum autem iter faciens in medio silvarum cum
Boheminibus obviantibus prelio commisso²⁾ victoriam optineret, : iamque pars
exercitus in campis Bohemie resideret, : Boriuoy a Boheminibus iam
receptus³⁾ Bolezlauo grates pro fide tanta retulit : et labore : et sic
inpiger Bolezlauus duplici de Bohemia rediit : cum honore. : Sed quid

rediens egerit audiamus, : ut¹ exemplo probitatis tante fructum aliquem capiamus. :

- 1) [訳注] 第三卷第十六章の注(2)を参照。なお次の系図を掲げる。



- 2) [P] 第二卷第四六章の注(3)を参照。
 3) [訳注] ボジヴォイは、一一〇九年十二月二四日にブラハを占領した。その様子は、『コスマの年代記』第三卷の第二八章から第三二章までの叙述が詳しく描いている。マレチンスキの『ボレスワフ・クシヴウスティ』の説明に依れば、それは以下の如くである。

シフィエントポウクが殺害された時、ヘンリク(ハインリヒ)五世は、ボヘミアの有力諸侯がグラティスワフの第三子ワァディスワフをボヘミア公の後継者とみなしていたにもかかわらず、シフィエントポウクの封土を彼の弟オットー二世に与えた。また、ボヘミア公の地位については、一一〇七年から追放されていたボジヴォイが、ボレスワフとドイツの有力侯ヴィプレヒトの支持のもとに、再び公の地位を要求した。一一〇九年の十二月にはヘンリクもこのボジヴォイの要求を認め、彼をボヘミア公に任じた。こうした背景の上で、ボジヴォイは、一一〇九年十二月二四日にブラハを占領した。しかしその後ヘンリクは方針を転換し、一一〇一年の一月ワァディスワフを支持してボヘミアに軍を進め、ボジヴォイを牢に繋いだ。

第十八章 ポモジャ人についての章

一
二
三

さて、ボレスワフは、このような行軍によって疲れ果てた軍勢がただちに帰路につくことを許さず、また自らも、迫り来る厳しい冬に対して¹⁾、娯楽や宴会で休息を取ることもせず、選り抜きの兵士を率いてポモジェの地に赴い

た。ボレスワフがその地にどれ程の期間留っていたのか。またその地において、どれ程の放火と略奪を行ったのか、それについて一つ一つ列挙していくことは適当なことではないであろうし、より重要な事柄へと急いでいる我々にとっては事柄の概要を描くだけで十分であろう。

さて、この時、ボレスワフはポモジェにおいて三つの砦を占領し、焼き払い、土を埋めて平地とし、ただもっぱら戦利品と捕虜だけを奪い取った。しかしその後、しばらくの間、戦を速ぎけて休息し、かつて皇帝が留っていたことのある自分の領地の諸都市の守りを固め、再び占領されないように整えた。

(18) CAPITULUM DE POMORANIS

Non enim statim exercitum tanto itinere fatigatum ire domum permisit, nec ipsemet in deliciis vel in conviviis asperitate yemis irruente¹⁾ requievit, sed terram Pomoranorum cum electis de exercitu militibus requisivit. § Quamdiu ibi steterit, vel quanta per terram incendia vel predas fecerit, non est opus per singula scriptitando demonstrari, sed summam rei, nobis ad maiora festinantibus, sufficiat explanari. § Illa namque vice Bolezlauus in Pomorania tria castella cepit, quibus combustis et coequatis solummodo predam et captivos excepit. Postea vero sine bello Bolezlauus aliquantulum repausavit, suasque civitates interim, ubi cesar fuerat, inexpugnabiles preparavit.

1) [M] 一一〇九年から一一〇年にかけての冬。おそらく一一〇一年の一月であろう。

第十九章 ボヘミア人とポーランド人についての章

さて、ボレスワフがグローグフの町の防備を固めようとして、軍勢とともにそこに留っていた時、ズビグニエフの騎士達は、ボヘミア人とともに略奪を行おうとしてポーランドに攻め入った¹⁾。しかし、ボレスワフの知らないう

(20) DE FRAUDE BOHEMRUM

Paulo superius memini me dixisse : Bohemos in sede supplantata Boriuoy ducem recepisse, : ideoque de Bohemia Bolezlauum ita subito redivisse¹⁾. : Sed quia fides Bohemica : volubilis est sicut rota²⁾ : qualiter prius Boriuoy expellendo traditorie deceperunt, : taliterque eum iterum decepturi traditorie receperunt. : § Nam brevi tempore non solum honore caruit : a fratre medio supplantatus³⁾ : verum etiam acquirendi facultatem amisit, : ab imperatore captivatus⁴⁾ : Tertium quoque fratrem habebat, etate quidem minorem, : probitate vero non inferiorem⁵⁾ : quem dux Bolezlaus in fidelitate fratris persistentem : in Polonia retinebat, : eique calumpniandi maioris fratris honorem : et consilium et auxilium impendebat. :

1) [P] 第三卷第一七章を参照。

2) [P] 第三卷の注(1)を参照。

3) [P] “frater medius” 「兄弟の間の真中の弟」——ボヘミア公ウァディスワフ、在位一一一〇年から一一二五年まで。

4) [訳注] 『コスマの年代記』第三卷第三十二章の記述によれば、ウァディスワフからボヘミアへの出兵の要請を受けたヘンリク(ハインリヒ)は、一一一〇年の一月、バンベルクを出発し、プラハに入城した。Maleczyn'ski. *Bolestaw Krzywousty*, p. 78.

5) [P] “tertius frater” 「三番目の兄弟」——ソビエスワフ。ボヘミア公としての在位は一一二五年から一一四〇年まで。

第二十一章 ボヘミア人に対する戦と勝利について

一〇九

さて、戦を好むボレスワフは、騎士の大軍を率いて、ボヘミアへの新たな出征の道を開いた²⁾。そして、この行為においてボレスワフは、驚くべき偉業をなしとげたハンニバルと肩を並べることができるであろう³⁾。というのは、ハンニバルはローマを攻略するために、まず手始めにヨヴィスの山を越えて進軍したが⁴⁾、それと同じようにボレスワフもボヘミアへ攻め入るために、はじめに人跡未踏の恐るべき場所を越えていったからである。かのハンニバルは、苦勞して一つの山を越え、それによってかくも大きな名声を獲得し、後

世からの回想の的になったが、ボレスワフは、雲に達する垂直の峰を、一つでなく数多く登りつめたのである。かのハンニバルは、ただ山を穿ち、尖った岩を平にするのに苦勞したが⁹⁾、このボレスワフは、断え間なく木の幹や岩をころがし、険しい山を登り、暗い森を貫いて道を開き、深い沼に橋をかけた。

こうして、ボジヴォイの正義と彼への友誼を守るために三日三晩このような困難な行軍を敢えてしたボレスワフは、疲労の極みに達したが、常に後世がその凱旋的勝利を追想する程の大きな業を成し遂げたのであった。すなわちボレスワフは、このような労苦を払ってボヘミアに侵入した後⁶⁾、ボヘミア人がポーランドに対してするように、強欲な狼のように⁷⁾略奪した後にすぐに国に帰るというのではなく、敢然と旗を高く掲げ、ラッパを吹き鳴らし、陣形を整え、太鼓を打ちならして、ゆっくりと目の前に広がるボヘミアの野を越え、戦を求め、しかしその機会を見い出せず⁸⁾、ただ一路に兵を進め、戦を終えるまでは略奪も放火も求めなかった。その間、ボヘミア人は、しばしば隊を組んで姿を現わしたが、ポーランド人が攻撃をはじめると、ただちに飛ぶように逃げ去った。また周辺の砦から多くの騎士が出陣してきたが、攻撃に出たポーランド人に出合うと、かえってポーランド人に砦の周囲を放火する機会を与えることになった。ところで、前にも言及した、ボジヴォイの一番下の弟は⁹⁾、ボレスワフに願い出て、兵士達が略奪や放火によって国を荒らすことを止めるように取り計らった。というのは、彼は少年らしい素朴な心で裏切者の言葉を信じ、戦なしでも、また勝利しなくとも王国を手に入れることができると信じたからである。

さて、四日目になり、戦を求めたボレスワフは、間道を通ってまっすぐにプラハをめざして急いだ。その時、ボレスワフは、さほど大きくはないが、渡るには困難な一つの川に近づいた¹⁰⁾。その川の対岸にはボヘミア公が軍勢を結集させて陣取っていた。ボヘミア公は、他の場所では敢えて合戦を試みようとしなかったが、その場所では、その地勢をあてにして¹¹⁾、ボレスワフの渡河を阻止すべく待機していたのである。他方、ボレスワフは、捜し求めていた敵を再び見い出したが、囲いの中に閉じ込められた獲物を見たライオンの如く激しく怒った。というのは、戦を交える手立てを見い出すことができなかったからである。実際、ポーランド人がある時は上流から、またある時

は下流から川を渡ろうとすると、川のその対岸にボヘミア人が陣を置いていたからである。しかもその川は、ボレスワフの陣にいたボヘミア人の偽りの案内によって、沼が多く、大軍にとっては、渡河の際の敵の抵抗が全くなかったとしても極めて危険な川であるとされていた。しかしながら、ボレスワフは、このように虚しく時が過ぎ、太陽が西に沈んで日が暮れるのを見ると¹²⁾、勇敢な騎士にふさわしい選択をボヘミア公に提案した。すなわち、ボレスワフが渡河の場所を提供するか、あるいはボヘミア公が場所を譲るならば、ボレスワフがその場所で渡河するか¹³⁾、そのどちらかを選ぶべきだ、と。そしてそれに付け加えて言った。「我ボレスワフが来たのは、決してボヘミアの首都を占領するためではなく、慣しに従って、かつて我が汝のためにしたように、追放された者達の正義と苦境にある人々の利益の擁護を自ら引き受けたからである¹⁴⁾。それゆえ、ボヘミア公が自分の弟を平穏に父祖伝来の地の相続領に呼び戻すか、あるいは万物の公正な裁き主が、我々の間で行われる平原の戦に真の正義を明示されるか¹⁵⁾、どちらかであろう。」

これに対してボヘミア公は答えた。「もし汝が汝の兄¹⁶⁾を受け入れるならば、我もまた喜んで我が弟を受け入れる用意がある。しかし皇帝の許しがなければ¹⁷⁾、敢えて弟と王国を分つつもりはない。しかし、もし我が汝と戦を交える意志と機会を持っていたとしても、汝から渡河の許しを待ち受けることはしないであろう。なぜなら、ずっと前からその権利を持っているから。」

(21) DE BELLO ET VICTORIA CONTRA BOHEMOS

Inde belliger Bolezlauus, collecta multitudine militari, : novam viam¹⁾ aperuit in Bohemiam²⁾, quo potest Hannibali facto mirabili comparari³⁾ : § Nam sicut ille Romam impugnaturus per montem Iouis primus⁴⁾ viam fecit, : ita Bolezlauus per locum horribilem, intemptatum prius, Bohemiam invasurus penetravit. : Ille montem unum laboriose transeundo tantam famam et memoriam acquisivit, : Bolezlauus vero non unum sed plures nubiferos quasi supinus ascendit. : Ille solummodo cavando montem, coequando scopulos laborabat⁵⁾, : iste truncos et saxa volvendo, : montes arduos ascendendo, : per silvas tenebrosas iter aperiendo, : in

paludibus profundis pontes faciendo, : non cessabat. : Tanto itaque labore Bolezlausus pro iustitia Boriuoy et amicitia tribus diebus et noctibus iter faciens, fatigatus, : tale quid in Bohemia fecit, unde semper erit triumphali memoria recordatus. : § Postquam tandem Bolezlausus tanto discrimine Bohemiam est ingressus⁶⁾, : non statim, predam faciens, ut Bohemi de Polonia, quasi lupus rapiens⁷⁾ est regressus, : immo vexillis erectis, : tubis canentibus, : agminibus ordinatis, : tympanis resonantibus, : paulatim per campos Bohemie patentes, bellum querens et non inveniens⁸⁾, incedebat, : nec predam, nec incendia prius, quam finem bello fieri, cupiebat. : § Interim Bohemi per turmas aliquociens apparebant, : sed statim Polonis irruentibus cursu prepeti fugiebant. : De castellis quoque contiguus multi milites exiebant, : qui Polonis irruentibus obviantes occasionem suburbia comburendi faciebant : Frater vero Boriuoy minimus⁹⁾, quem predixi : predas capi, : incendia fieri, : terram destrui, : Bolezlauso supplicans prohibebat, : quia regnum acquirere sine bello puerili simplicitate verbis traditorum sine victoriis se credebatur. : § Cumque iam die quarto bellum expectans Bolezlausus ad Pragam recto tramite properaret, : fluvioque cuidam¹⁰⁾, non magno quidem sed difficili transitu, propinquaret, : ex altera parte fluminis exercitu congregato dux Bohemorum residebat, : qui Bolezlauum ibi, non ausus alibi, : difficultate loci confisus¹¹⁾ : transitum prohibiturus : expectabat. : § At Bolezlausus repertis hostibus, quos querebat, : quasi leo visa preda septis conclusa stomachabatur, quia pugnandi copiam non habebat. : § Nam sicubi Poloni modo sursum, modo deorsum transire reputabant, : ex altera parte fluminis ibi Bohemi contra stabant. : Erat enim fluvius Bohemis, qui cum eo erant, mentientibus, paludosus, : tante multitudini nullo. resistente periculosus. : § Videns autem Bolezlausus, quod sic agens tempus in vacuum expendebat : et quod dies sole (ad occasum vergente¹²⁾ declinabat, : electionem audacie militaris duci Bohemico proponit, : videlicet : aut Bolezlausus sibi locum dabit, : ut transeat, : vel illuc transibit, : si dux Bohemicus loco cedat¹³⁾, : § asserens etiam occupandi causa sedem se Bohemicam non venisse, : sed more solito iustitiam fugitivorum : causamque miserorum, : sicut quondam sibi fecerat, defendendam suscepisse¹⁴⁾. : § Quapropter aut suum fratrem in sorte hereditatis paterne pacifice revocaret, : aut iustus iudex omnium inter sese prelio campestri

veram iustitiam declararet¹⁵⁾. : § Ad hec dux Bohemicus respondit :
 Fratrem quidem meum libens recipere, : si tuum receperis¹⁶⁾ : sum
 paratus, : sed cum eo regnum dividere, : nisi consilio cesaris¹⁷⁾, : non sum
 ausus. : § Si vero voluntatem vel facultatem habuissem vobiscum cominus
 confligendi. : non vestram licentiam expectarem, cum longe habuerim
 prius licentiam transeundi. :

- 1) [M] “nova via” 「新しい道」。それゆえ、この道は「コウォツコへの道」 “tramite ad Ktodzko” ではなく、トルトノフ Trutnow に結びついた道か、あるいはまっすぐ山を抜く道である。
- 2) [M] この出征は、一一一〇年の九月と十月の月に行われた。『コスマの年代記』第三卷第三十五章参照。

[訳注] 『コスマの年代記』第三卷第三十五章の文章は以下の如くである。

「同じ年、ヴァディスワフ公とボヘミアの全ての民が、自分達の守護聖人ヴァツラフの生誕の祝祭を喜びと陽気のうちに催していた時、公のもとに一人の使いが来て、次のような知らせを伝えた。『諸君が平穩に宴会を催している間に、汝の弟ソビエスワフとポーランド公ボレスワフがこの土地を荒らし、民をあたかも安っぽく積まれた穀物の山のように略奪している。私自身、このことをあなたに告げるためにやつのことで逃げ帰ってきたところだ。さあ、急いで兵を出したまえ。貯蔵庫を閉じて、宴席を去りたまえ。マルスの神が諸君を戦へと呼び出している。明日にも何千という武装した敵が現われるであろう。』彼らはただちに宴席から立ち上り、すばやく軍勢を召集し、ルツィツェ Lucice と呼ばれる村の近くを流れるツィドリナー Cidlina という川のこちら側から敵に向っていった。しかしこの同じ川の反対の側から、ポーランドの軍勢が、略奪も放火もせず、ゆっくりと進んできて、オールドリス Oldris という砦の近くを通り、エルベ川の波打つ岸まで近づいた。そこから彼らは使者をヴァディスワフに派遣して、狡猾にも次のように言った。『我等は、敵意を抱いて槍を担いできたのではなく、また戦をしにきたのではなく、汝を汝の弟と和解させるために来たのである。しかしもし汝が我等の戒めに耳を傾けたくないと思えば、我等は明日川を渡ろう。そしてその他のことは、その後アーメンとなるだろう。』

これに対して、ヴァディスワフ公は手短かに応えた。

『我思うに、この年は、大きな流血のない平和な年にはならないだろう。なぜなら、誰も和平の締結のために武器を携える者はいないからだ。汝が川を渡ったとしても、その他の事の後にアーメンはやってこないだろう。汝は川を渡るがよい。しかし罰を受けずに国に帰ることはないであろう。汝が語るその他の事は私がそれを為す。汝は汝が欲するその他の事を為せ。』

しかしながら、ヴァディスワフ公は、不幸にも敵の狡猾な言葉を信じ、その夜、まだ太陽が昇らぬ前に、自分の軍勢を率いて川を渡り、この川の対岸に着いた。他方、ポーランド人は、自分達の狡猾な計略が成就したのを見て、この国に対する攻撃をはじめ、放火と略奪によって土地を荒廃させ、夥しい戦利品を背負って、クルヴツィ Criucy と呼ばれる橋の近くに陣を張った。しかし我が方の軍勢は、その晩あまりにも疲れていて、すばやく帰ることができずにいたので、ただ杳然としていただけであった。」

35. Eodem anno duce Wladizlao et universa plebe Boemorum cum iocunditate

et laetitia sui patroni^e Wencezlai celebrantibus natalicia, nuncius affuit duci qui talia retulit : *Vobis hic in tranquillitate et securitate convivantibus, sed fratre tuo Sobezlao et duce Poloniorum Bolezlao terram hanc depopulantibus, et populum quasi viles messis acervos diripientibus, ego vix solus aufugi, ut haec nunciarem tibi. Accelerate viam, iam claudite vestra promptuaria, linquite convivias, Mars vocat vos ad praelia, cras aderunt hostium armata¹ mille milia.* Qui continuo surgentes de convivio, et celeriter exercitu collecto, occurrunt eis ex ista parte amnis Cydlina iuxta pagum qui dicitur Lucica. Ast alia de parte eiusdem amnis sine rapinis et sine incendiis ibant incedentes² Poloniorum phalanges, quoad usque pervenientes iuxta oppidum Oldris³ applicuerunt ad undam Labe fluminis ; inde mittunt ad ducem Wladizlaum dolo⁴ dicentes :

*Non nos hostilia portamus astilia¹,
nec venimus pugnare, sed te fratre² cum tuo pacificare.
Sin autem nostris monitis adquiescere non vis,
cras transibimus flumen, et caetera post haec Amen.*

Ad haec dux Wladizlaus paucis respondit :

*Non erit hoc anno puto³ pax sine sanguine magno,
Ad foedus pacis⁴ quia nemo venit in armis.
Transibis⁵ flumen, post caetera non erit Amen ;
Flumen transibis, sed non impune redibis⁶.
Caetera quae dicis faciam, fac caetera quae vis.*

Et statim male credulus verbis hostium dolosis,
cum suis nocte illa transvadantes fluvium ante ortum solis,
ex adverso applicuerunt ripis^e eiusdem fluminis.

Poloni¹ autem ut viderunt dolos suos² profecisse³, fecerunt impetum super terram, et eam devastantes incendiis et rapinis, immensa⁴ praeda onerati iuxta pontes Criucy⁵ sunt castra metati. Nostrates autem, quia illa nocte nimis fatigati fuerant, nec tam cito retransvadare¹ poterant, stabant stupefacti.

なお、ポーランド側の他の資料にも、この戦についての記事が残されている。『古聖十字年報』に次のようにある。“1110, Bolezlau tercium intrat Boemyam.” 「一一〇年、ボレスワフ三世、ボヘミアに侵入する。」(M. P. H. t2. p.773) また『トラスキ年報』や『クラコフ年報』の-----年の欄に「ボレスワフ三世、ボヘミア人を打つ。」とある。

- 3) [P] 紀元前二一八年、今日の南フランスからイタリアに攻め入ったカルタゴのハンニバルのアルプス越えを指している。ラテン語文献の中でこの進攻についての最も詳細な、最も有名な記述は、リヴィウスの歴史の中にある(第二十一巻、第三十二章から第三十七章)が、ガルガリヴィウスを知っていたか否かは不明である。
- 4) [P] 作者は、聖ベルナルドス山の頂きと峠をこのように呼んでいる。そこには、古代からヨヴィス崇拝(ジュピター=木星)が行われていたとされる。
- 5) [訳注] ハンニバルのアルプス越えに関するこのような描写は、シリウス・イタリクス Silius Italicus の『カルタゴ人』“Punica”の第三巻に依っている。とプレジアは推定している。
- 6) [M] 一一一〇年九月二十八日。『コスマの年代記』第三巻第三十五章参照。
- 7) [M] Genesis, 49-27. “Benjamin lupus rapax, mane comedet.” 『創世記』四九一

- 二七「ベニヤミンは強欲な狼、朝には喰らい」。
- 8) [M] Mattheus, 12-43. "immandus spiritus……ambulat……quaerens requiem……non invenit……"「マタイによる福音書」十二四三「汚れた霊は……うろつき、平安を求めたが見い出せず」。
- 9) [P] ソビエスワフ Sobieslaw。
- 10) [P] ツイドリーナ川。チェコ北部を流れる、エルベ川右岸の支流。
- 11) [M] Sallust, *Bellum Iugurthinum*, 98-5. "reges loci difficultate coacti," サルスティウス『ユグルタ戦記』九八一五「王達は、地勢に強いられて」。
- 12) [M] 一一一〇年十月三日のこと。
- 13) [P] グルンバルトの戦の前に、ウァティスワフ・ヤギェウオに対してなされたドイツの十字軍騎士団の類似の呼びかけを参照せよ。
- 14) [M] Sallust, *Bellum Catilinae*, 35-3. "publicam miserorum causam……suscepi" サルスティウス『カティリナ戦記』三五一三「貧しい人々の公的利益を引き受けた」。
- 15) [P] これが、中世における、神の裁きについてのよく知られた考え方である。
- 16) [P] ズビグニエフを指す。
- 17) [P] おそらく年代記作者は、故意にボヘミア公ウァティスワフの回答を定式化しているであろう。すなわち、それをヘンリク(ハインリヒ)五世に与えたポーランドのボレスワフの回答と対照させているのである。

第二十二章 ポーランド人によるボヘミアの地の劫略について

さて、ボレスワフは、ボヘミア公が自分にあてた返答の中で、単なる空虚な言葉以外にはいかなる明確な内容も与えていないことを知って、その日の夜明け前¹⁾、人が寝静まる休息の頃²⁾、陣営を引き払って、かの小川³⁾の岸から離れずにエルベ川の方に降りていった。そしてエルベ川の近くでこの小川を易易と渡り³⁾、戦をあきらめたあの場所に急ぎ、そこで再び戦を求めた。しかしボヘミア人の留っていた場所に着いてみると、痕跡の他には何も見い出すことができなかった。それゆえボレスワフは、長老達を召集して評議を催し、そこで、より有益で、より名誉にかなったことと思われることを、分別の心を失わずに決定した。実際、長老の一人はこのように言った。「敵勢の結集を眼の前にしながら戦を交えることができなかったとしても、三日間、勇敢に敵の土地を踏みしめたことで、我々にはすでに十分であろう。」また新たに別の人が主張した。「神の裁きは真実なものであるが、人間には隠されている⁴⁾。今まで我々はうまく対処してきたが、これ以上永くこの地に踏み込むならば、

運命がどこで転変するか、わからない。」それに対してボレスワフと若者達は長老の忠告を軽く見て、今までのようにプラハへ進むことを主張した⁵⁾。もしパンが不足していなかったならば、一人の若者の意見が長老のそれに打ち勝っていたであろう。なぜならパンは市民法⁶⁾がなしうるよりも多くのことをなしうるからである。

こうしてボレスワフは、帰還の勧めにやっと同意し、帰路における放火と略奪の許可を与えた。他方、ボレスワフ自身は、つねに部隊を整えて進み、しばしば殿^{しんがりぞなえ}備とともに、後陣の支えとして働いた。さらにボレスワフは、騎士の部隊を組みなおしたが、これらの部隊は、放火と略奪を行う兵士達の先駆けをなし、また襲ってくるボヘミア人からポーランドの兵士達を守った。こうしてボレスワフは、ある時は賢明に、またある時は大胆に、軍勢を前へ、また後へと率いて、金曜日の日に⁷⁾森の入口に至り、そこで陣営を張ったが、その時、見張番をより密にし、各部隊が戦闘の態勢を取り、万一混乱が生じた場合でも自分の持場に留まるように命じた。

その日の夜、ボレスワフが早朝の祈りの後⁸⁾、祈禱の場に留まっていた時に、たまたま何かの恐慌が全ての部隊を襲い、突然に巻き起った叫び声が全軍を蔽った。その時、いかなる地方の部隊も⁹⁾、武装したいかなる分隊も、決められたとおりに自分の部署を守り、自分の陣地に留まった。他方、宮廷風の武器を身につけていた近衛部隊は、ボレスワフの近くに陣取り、そこで勝利か滅亡かを覚悟した。ボレスワフは人々の叫び声を聞いた時、そばにいた多くの若者達に囲まれていたが、演説をするために少し高い所に登り、そこで、自分の言葉によって、勇気ある者には大胆さを与え、憶病な者には恐れと不安を取り去って、次のように励ました。

(22) CAPITULUM DE VASTATIONE TERRE BOHEMICE PER POLONOS

Videns autem Bolezlauus, quia dux Bohemicus in hiis responsionibus, quas mandaret, : nullam certam rationem, nisi verba solummodo nuda daret, : crepusculo diei¹⁾ : tempore requiei¹⁾ : castra movit, : nec ab illius ripa fluminis ad Laba flumen²⁾ descendendo se removit. : § Ib vero iuxta

Labe flumen illum fluviolum sine obstaculo pertransivit³⁾ : et festinans ibi bellum, ubi dimiserat, requisivit. : § Cum autem ad Bohemorum staciones perveniret, : nec aliud de ipsis, quam vestigia, reperiret convocatis senioribus consilium inivit, : ubi satis, : quod salubrius et honestius esse videbatur, cum ratione diffinivit. : Quidam enim de senioribus aiebant : Tribus diebus satis sufficit per virtutem in terra hostium nos stetisse, : nec bellum illis omnibus congregatis et presentibus invenisse. : Iterum alii dicebant : Iudicia Dei vera sunt et hominibus occultata⁴⁾ : bene processimus usque modo, sed si diucius immoramur in dubio pendet, quo se verterint ista fata. : § Econtra Bolezlauus et iuvenes seniorum consilia postponebant. : et ire Pragam ut in antea conlaudabant⁵⁾. : § Et vere vicisset seniorum consilia consilium iuvenile, : nisi panis defecisset, qui plus potest, quam possit facere ius civile⁶⁾. : Collaudato vix itaque consilio Bolezlauus redeundi, : redeundo comburend dedit licenciam et predandi. : Ipse vero semper ordinatis cohortibus i incedebat, : plerumque cum extremis agminibus pro subsidio subsistebat. : § Habebat etiam acies militum ordinatas, qui combustoribus et predatoribus anteirent : et a Bohemis supervenientibus providerent. : Cumque tam prudenter tamque sagaciter exercitum duxisset ac reduxisset : et ad silvarum introitum VI feria⁷⁾ iam stationem posuisset, : vigiliis crebriores fieri, paraciores esse unamquamque legionem, si tumultus forte fieret, : in sua stacione persistere precepit. : § Eadem nocte Bolezlauo post matutinas⁸⁾ orationibus persistente, forte quidam horror universam stacionem occupavit : et clamorem subitaneum per totum exercitum excitavit. : Tum queque provincia⁹⁾ : queque cohors armata, : sicut constitutum fuerat, in sua stacione perstitit, suum locum defensura ; : acies vero curialis curialiter armata circa Bolezlauum astitit, ibi victura, : vel ibidem moritura. : § At Bolezlauus audito clamore populi statim iuvenum multitudine circumstantium coronatus, ascendit in locum locuturus aliquantulum altiorem, :
—
○
—
ibique sua locucione probis auxit audaciam, timidis horrorem ademit pariter et timorem, : sic exorsus :

1) -- 1) [M] おそらく、それぞれが七音節からなる二連のトロカイックの詩。

2) [P] ツイドリーナ川。

3) [M] 『コスマの年代記』第三卷第三十五章参照。

- 4) [M] Daniel, 3-27. "et viae tuae rectae et omnia judicia tua vera." 『ダニエル書』三一二七「汝の道は正しく、汝の裁きはすべて真実である」。(〔訳注〕この部分は、ヘブライ語テキスト—合同訳聖書にはなく、『セプチュアギンタ』—ウルガータ聖書のテキストに依っている。)
- 5) [M] この評議は、『コスマの年代記』第三卷第三十五章によると、クリウチ橋の近くで行われたと思われる。
- 6) [P] テキストは "jus civile" 「市民法」であるが、「社会を統治する法」 "prawo rządzące ludzką społecznością" であって、一国の国民・住民を統治する法である。作者の意見によれば、この法は、長老の意見は弱者の意見よりも尊重されるべきである、とされる。
- 7) [M] ……○年十月七日。『コスマの年代記』第三卷第三十六章参照。
- 8) [P] "matutina" —— 聖職者の聖務日課の最初の部分で「朝の祈り」——。かつては、夜明けごろ行われた。従ってこの日は、すでに十月八日となっている。
- 9) [P] ここから、ポーランドの軍隊は、地域毎に編成されていたことがわかる。

第二十三章 ポレスワフの大胆さと先見の明について

「その素行と生れにおいて世に知られた若者達よ、いつも我が近くにおいて戦に鍛えられ、いつも我とともに労苦に慣れた若者よ、自信を持って己を堅く保て。同時に喜びに満ちて今日という日を待ち望め¹⁾。なぜなら、今日という日は汝等を凱旋の名誉で飾るからである²⁾。今日までポヘミア人は、海や森の怪のように我等の子羊達を略奪し、それらを引き連れて森に逃げ込み、ポーランド人を嘲笑し、そうすることを騎士の業と考えている。他方、汝等は、彼らの国を七日の間駆け巡り、村と町の周囲を焼き払い、彼らの公と結集したその軍勢の姿を見て戦を追い求めたが、ついに戦に遭遇することがなかった。しかし、たとえポヘミア人が戦に臨もうと臨まないにかかわらず、今日こそ、神の御力によってポーランド人は自分の蒙った不義不正に報いることができるだろう。そして汝等が戦に打って出る時には、略奪された娘達、妻達、女達のことを思い起こせ³⁾。また幾度彼らが汝等を怒らせたか、幾度彼らが、逃げ去っては、追跡する者を疲れさせたか、を思い起こせ。名のある騎士達よ。兄弟達よ、今こそ奮い立てよ、快活な我が若者達よ。戦場にて大胆になれ⁴⁾、今日という日は⁵⁾、いつも汝等が望んできたものを汝らにもたらずであろう。今日という日は、かくも永い間汝等が耐えてきた苦しみを消し去るであろう。すでに暁の光が現われ⁶⁾、たちまちこの栄光の日が輝き出で

あろう。その日はボヘミア人の裏切りと不信仰を明るみに出し、彼らの傲慢と慢心を砕くであろう⁷⁾。そしてその日は、我等と我等の先祖の蒙った不義不正に報いるであろう。誓って言う。この日はポーランドにおいて常に記念されるべき日となるであろう。この日は偉大な日であり、また苦き日である。この日はつねにボヘミア人にとって戦慄すべき日となろう。この日はポーランド人にとっては栄光の日となり、この日はボヘミア人にとっては忌むべき日となるであろう⁸⁾。誓って言う。この日はすべての者にとって喜ばしい剣舞の宴の日となり、ボヘミア人の額を大地に押しつける日となるであろう。この日、全能の神は、御自身の偉大な右手によって我等の謙遜の角を高くされるであろう⁹⁾。」

この演説が終ると、部隊の陣営毎に一般ミサがとり行われ、神の言葉が教区毎に司教によって説かれ¹⁰⁾人々はすべて聖体拝領によって力強くされた。

これらの事柄が厳かにとり行われた後、兵士達は隊列を組んで、いつものやり方に従って各々その陣営から出陣し、ゆっくりと森の入口に近づいた。さてこのような大軍が森に入った時¹¹⁾、軍勢は場所の目印も道の跡も知らなかったのも、兵士は一人一人道なき道を切り開きながら進んだ。それゆえに、誰も戦旗や隊列を保持することができなかった。実際、軍勢は、通ってきた道も他のすべての道もすでに塞がれたという声を聞いた時、これ程の大軍を通す程には広くない別の道を通して退却したのである。その時ボレスワフ公は近衛兵とともに右側から背後を守り、自分の軍勢のすべてを、あたかも良き牧者のように通してやった¹²⁾。スカルビル伯も反対の側から、ボレスワフの知らないうちに小さな森の中に隠れて、その地で時致ればボヘミア人を追撃しようとして待伏せていた。他方、ポーランドの守護聖人に捧げられたグニエズノの部隊は¹³⁾、若干の廷臣と勇敢な騎士達とともに、ある小さな平地に展開して、戦っていた彼らの君主をそこで待ち受けていた。その平地は大きな森と、前にある小さな森とを分けていた。ボレスワフが小さな森を抜けて自分の軍勢の後を側面から追跡しようとした時、ボレスワフ自身、自分の軍勢を目撃したが、ボレスワフの姿も目撃された。その時ボレスワフは、自分の軍勢を敵と思ったが、同じように味方の軍勢もボレスワフを敵と見なした。しかし互いに近づいて、より正確に武器を見ることができるようになった時、はじめて兵士達はポーランドの旗の印を認め、ほとんど始まっていた冒瀆的

犯罪行為を中止したのであった。

その間にボヘミア人は、ほとんど勝利を確信した者のように、最初は部隊の形をとらず群をなして、そしてやがて一人また一人と突進していった。というのは、彼らは、ポーランド人は森の中に取り込まれて、もはや戦を行うことができず、隊列を乱してばらばらに隠れていると考え、ウサギを捕えるようにポーランド人を捕えることができると確信していたからである。

しかしながら、戦好きのポレスワフは、敵が近くにいるのを見て叫んだ。「若者よ、闘いを始めるも、終らせるも我等次第だ。」このように叫んで、即座に長槍で部隊の最前列の者を馬上から突き殺してあお向けにし、またポレスワフと同時に酌頭ディエルジクも別の敵兵に、死をもたらす飲み物を与えた¹⁴⁾。それからポーランドの若者は競って突撃し、はじめは槍で戦を始め、それが使い切られてしまうと剣を抜いた。接近してきたボヘミアの兵士のうち、わずかな者しか盾によって身を隠すことはできず、鎖帷の重さは彼らにとって助けとはならず、兜はそれを被る者に誉れをもたらしたが、救いをもたらさなかった¹⁵⁾。

そこでは、鉄と鉄とが激しく打ち合い

そこでは、大胆な騎士が誉れを受け

そこでは、力が力によって打ち負される¹⁶⁾。

屍が累々と横たわり¹⁷⁾、顔と胸は汗で濡れ¹⁷⁾血の川が流れ、ポーランドの若者が叫ぶ。「強欲な狼のように¹⁸⁾ひそかに獲物を奪って森の中に逃げ込むことなどせず、ただひたすら名誉を求めるところこそ、誉むべき男の徳であろう。」

先頭に陣取っていたボヘミア人とドイツ人の光り輝く甲騎兵は、身に負われた武具に助けられるのではなく、かえってその重みによってまず最初に倒れた¹⁹⁾。しかしそれでもなおボヘミア公は、騎士の精華が打ち倒されて横たわっているにもかかわらず、二度、三度と部隊を引き戻し、蒙った損害に報いようと努めた。しかし幾度試みても味方の死者の山を増やしたにすぎなかった。

スカルビミルもまた、森によって隔てられてはいたが、近衛兵を率いて²⁰⁾ボヘミアの他の部隊と白兵戦を演じていたので、ポレスワフはスカルビミルについて、またスカルビミルもポレスワフについて、それぞれがどこにいるの

か、またそもそも戦に加わっているのか、全く見当がつかなかった。相い戦う二つの陣営の上でマルスがその力を揮い²¹⁾、フォルトナが載れ、ボヘミア人の運命の車輪が回転し、女神パルカ達によってボヘミア人の命綱は断ち切られ、ケルベルスは食欲な口を開き、渡し守りはアケロンを苦勞して舟で渡り、プロセルピーナは笑い、フリアは彼らの前に蛇の衣を広げ²¹⁾、エウメニデスは硫黄の浴場を整え、プルトーはキクロペスに、手柄を立てた誉れ高い騎士のために冠を作るように命じる²²⁾。その冠は、蛇の歯と竜の舌から出来ている²³⁾。しかし、なぜこれ以上ためらう必要があるのか。

自分達の業が神の裁きに適わず、ポーランド人の勇気と正義が卓越しているのを見たボヘミア人は、その場で彼らの精鋭部隊が倒れた時、部隊のまま、あるいは四散して逃亡を始めた。しかしポーランド人は、すぐには彼らが逃亡しているとは思わず、それを装っていると考えた。というのは、ポーランド人とボヘミア人之间にあった山峽と森がボヘミア人を助け、彼らの逃亡と奸計を覆い隠したからである。それゆえポーランド公ボレスワフは、熱り立つ騎士達に、慢心を抱いたままの追跡を禁じた。というのは、ボヘミア人の奸計と待伏せを恐れたからである。しかしながら、遂に、ポーランド人はボヘミア人の逃亡が真実のものであると確認すると、ただちに馬の手綱をゆるめて追撃した。こうしてポーランド人は凱旋的な勝利を取めたが、ポーランドへの帰路の道を急がず、ボヘミアの地で傷を負った仲間を運んで帰還した。以前に経過した日数を加えると、出征の期間は十日を数えるものとなった。

こうして好戦的な部族ボヘミア人は、裏切り者の^{はかりごと}謀によって大変な損害と恥辱を蒙り、勇敢で高貴な騎士を失い、ポーランド人の足下に踏みにじられ、追い払われた。またボヘミア人の側に立っていたスビグニエフは^{いき}24)その場に留まるよりも、ボヘミア人と同じように逃亡したが、その方が彼のためになった。他方、大きな戦勝の喜びのうちにボヘミアから帰国したポーランド人は、全能の神に永遠の感謝を捧げ、勝利したボレスワフに称賛の言葉を捧げた。

(23) CAPITULUM DE AUDAOIA
BOLEZLAY ET PROVIDENTIA

O (iuventus) inclita : moribus et natura, : mecum semper erudita bello, mecum assueta labore ; : securi sustinete, : pariter expectate : leti diem¹⁾ hodiernum, qui vos triumphali coronabit honore²⁾ : Hactenus Bohemi sicut monstra marina vel silvatica de gregibus nostris aliquid rapuisse : et cum eo per silvas aufugisse : Polonis insultabant : et pro militia reputabant. : § Vos vero iam die VII terram eorum circuistis, : villas et suburbia combussistis, : eorum ducem et exercitum congregatum vidistis, : bellum quesistis : nec invenire potuistis. : Quippe aut hodie Bohemi si bellum non commiserint, : aut si commiserint, : hodie Deo iuvante Poloni suas iniurias vindicabunt. : Et cum prelium inieritis memores estote³⁾ preदारum, : captivorum, incendiorum ; : memores estote puellarum raptarum, : uxorum et matronarum ; : memores estote quociens vos irritaverunt ; : memores estote quociens, ipsi fugientes, : vos insequentes : fatigaverunt. : Ergo sustinete modicum fratres et milites gloriosi, estote fortes⁴⁾ in bello iuvenes mei letabundi. : Hodierna dies⁵⁾ vobis conferet, quod semper optastis, : hodierna dies dolorem delebit, quem tanto tempore comportastis. : Iam aurora (ap) paret⁶⁾, cito dies illa gloriosa exardebit, : que tradicionem et infidelitatem Bohemorum revelabit : et presumptionem et superbiam eorum conculcabit⁷⁾ : et que nostras et parentum iniurias vindicabit. : § Dies inquam, dies illa, : dies semper in Polonia recolenda ; : dies illa, dies magna et amara, : semper Bohemis et horrenda, : dies illa, dies Polonis gloriosa ; : dies illa, dies Bohemis odiosa⁸⁾ : dies, inquam, omni tripudio letabunda, : que frontes hodie Bohemorum humotenus inclinabit, : in qua Deus omnipotens cornu humilitatis nostre dextera sue magnitudinis⁹⁾ exaltabit : Hac oratione completa missa generalis per omnem stationem celebratur, : sermo divinus suis parrochianis ab episcopis¹⁰⁾ predicatur, : populus universus sacrosancta communionem confirmatur. : § Quibus rite peractis, cum ordinatis agminibus more solito de stationibus exierunt : et sic paulatim ad silvarum introitum pervenerunt. : § Cum autem ad silvas tanta multitudo pervenisset¹¹⁾ : neque loci notitiam, neque vie vestigium habuisset, : unus-

quisque sibi viam per devia faciebat : et sic signa vel ordinem retinere iam nequiebat. : Obstrusam enim viam, qua venerant, et omnes alias audiebant : et ideo per viam aliam, non capacem tante multitudinis, rediebant. : Dux vero Bolezlaus retro de latere dextro cum acie curiali subsistebat : totumque suum exercitum sicut pastor¹²⁾ egregius premittebat. : Comes quoque Scarbimirus ex altero latere in silva tenui Bolezlauo (nesciente) latitabat, : ibique Bohemos, si forte sequerentur, in insidiis expectabat. : § Gneznensis etiam acies, patrono Polonie dedicata¹³⁾ cum quibusdam palatinis aliisque militibus animosis in planicie quadam parva dominum subsistentem expectabat, : que planities silvas maiores a minori silva prostante dividebat. : Cumque Bolezlaus ex obliquo suum exercitum per silvam tenuem sequeretur, videns suos et a suis visus, : hostes reputavit suos, a suis etiam hostis similiter estimatus ; : sed propius (ad) invicem accedentes : et arma subtilius contemplantes, : signa Polonica cognoverunt : et sic a pene cepto scelere desierunt. : Interim Bohemi, quasi iam certi de victoria, non ordinati prius catervatim, sed unus ante alium properabant, : quia Polonos in silva iam receptos, ad prelium irrevocabiles, inordinatos, latitantes, dispersos se capere sicut lepores reputabant. : § At belliger Bolezlaus, visis hostibus iam vicinis, : exclamavit : Iuvenes, ferendi nostrum sit initium, noster quoque finis. : Hoc dicto, statim venabulo primum in acie de dextrario supinavit : et cum eo simul Dirsek pincerna potum alteri mortiferum propinavit¹⁴⁾. : Tum vero iuventus Polonica certatim irruunt, : lanceis prius bellum inferunt. : quibus expletis enses exerunt, : clipei paucos de Bohemis accedentes ibi clepunt, : lorice pondus non subsidium illis reddunt, : galee honorem ibi capitibus non salutem acquirunt¹⁵⁾. :

Ibi ferro ferrum acuitur,
Ibi miles audax cognoscitur,
Ibi virtus virtute vincitur.¹⁶⁾

九五

Corpora strata iacent,¹⁷⁾ : sudore vultus et pectora madent¹⁷⁾, : sanguine rivi manant, : iuvenes Poloni clamant : : sic est virtus approbanda viris, sic famam querendo : non predam furtim rapiendo : silvamque petendo : rapidorum more luporum¹⁸⁾ : Ibi fulgens loricatorum acies Bohemorum et

Theutonicorum, : que prima fuit, : prima corrui, : gravata pondere, non adiuta¹⁹⁾ : Adhuc tamen dux Bohemorum vice secunda, tertia, iam flore milicie prostata iacente, suum dampnum catervas retorquens, vindicare nitebatur, : semperque suorum congeries corruencium augebatur. § Scarbimirus quoque cum acie palatina²⁰⁾ silvula dividente, cum aliis Bohemorum agminibus dimicabat, : ita quod Bolezlauus de Scarbimiro vel Scarbimirus de Bolezlauo penitus, ubi staret, vel si prelium ageret, ignorabat. : Ex utraque parte Mars suas vires exercet²¹⁾, fortuna ludit, rota Bohemorum eversatur, : a Parcis fila Bohemorum secantur, : Cerberus ora vorantia laxat, : portitor Acheronti navigando laborat, : Proserpina ridet, Furie viperinas illis vestes explicant, : Eumenides balnea sulphurea parant, : Pluto iubet Cyclopes dignas fabricare coronas²²⁾ militibus merito venerandis. : dentibus anguinis, linguis nec non draconinis²³⁾ : Quid multis moramur ? § Videntes Bohemi suam causam divino iudicio non placere : et Polonorum audaciam cum iusticia prevalere : suorum ibi meliorum acie prostrata, catervatim, divisim fugam arripiunt, : nec eos fugere Poloni statim percipiunt, : sed fugam simulare credunt. : Convallis enim media quedam et silva Bohemos adiuvat, : que fugam eorum vel insidias occultabat. : Ideo dux Polonorum Bolezlauus milites impetuosos presumptuose persequi prohibebat, : quia cautelam Bohemorum et insidias dubitabat. : § Comperta tandem Poloni vera fuga Bohemorum, : insequentes statim laxant suorum habenas equorum. : Ergo potiti Poloni victoria triumphali, reduendi Poloniam iter ineceptum (non) differunt, : suos sauciatos in Bohemia redeuntes secum ferunt, : superioribus adiectis denarium profectionis numerum impleverunt. : § Ad hoc enim detrimentum et dedecus bellica gens Bohemorum traditorum factionibus est redacta, : quod pene militibus probis et nobilioribus, : Polonorum conculcata sub pedibus, : est exacta. : Ibi quoque cum Bohemis Zbigneus²⁴⁾ interfuit : cui fugisse similiter, quam ibi stetisse, plus profuit. : § Poloni vero de Bohemia cum ingenti tripudio remeantes, : omnipotenti Deo grates rependunt eternas : et Bolezlauo triumphanti laudes referunt triumphales. :

1) [M] Lametationes, 2-16. “en ista est dies, quam expectabamus.”『哀歌』二一一六「ああ、これこそ待ちに待った日だ。」

- 2) [M] Psalm, 8-16 “gloria et honore coronasti eum,” 『詩編』 八—一六「栄光と威光を冠としていただかせ」。
- 3) [M] Sallust, *Bellum Catilinae*, 58-8 “cam proelium inibitis, meminere vos divitias, decus, gloriam, ……in dextris vestris portare,” サルスティウス『カティリナ戦記』五八一—八「戦を始める時、諸君は、富、名誉、栄光……が諸君の右手に掛っていることを思い起せ」。
- 4) [M] 2 Samuhel, 10 12, “esto vir fortis et pugnemus pro populo nostro et civitate Dei nostri.” 『サムエル記下』 十—十二「大胆な勇士たれ、そして我らの民と我らの神の町々のために戦おう。」
- 5) [M] “Hodierna dies” 「今日という日」——これはウルガータに非常によく登場する言葉である。
- 6) [M] Genesis 32-26. “Dimitte me, jam enim ascendit aurora.” 『創世記』 三二—二六「もう去らせてくれ、暁の光が登るから」。
- 7) [M] Levit, 26-19. “conteram superbiam duritiae vestrae.” 『レビ記』 二六—一九「私はあなたたちの固い傲慢な心を打ち砕く。」 ([訳注] 合同訳は「誇りとする力」と訳すが、原文の翻訳としてはウルガータ訳の方が良いと思われる。אֶת־נַפְשׁוֹ וְאֶת־קִרְבָּנוֹ וְאֶת־כָּל־אֲשֶׁר־לָהֶם)。
- 8) [M] Sofonia, 1-15-16. “dies irae dies illa dies tribulationis et angustiae dies calamitatis et miseriae dies tenebrarum et caliginis dies nebulae et turbis dies tubae et clangoris super civitates munitas et super angulos excelsos” 『ゼファニヤ書』 一—十五「その日は憤りの日、苦しみと悩みの日、荒廃と滅亡の日、闇と暗黒の日、雲と濃霧の日である。城壁に囲まれた町に対して、また城壁の角の高い塔に向かい、角笛が鳴り、関の音があがる日である」。
- [P] この箇所はとくに “Absolutio super tumulum.” 「墓への懺悔礼」と呼ばれ、死者を哀悼するカトリックの礼拝形式の中で引用されるものである。ボヘミアの『コスマの年代記』もガルに極めて類似した表現で一〇三八年のポーランドに対するボヘミアの勝利と聖ヴォイチェフの聖遺物のグニエズノからの移転を賛美していることは注目に値する。
- 9) [M] 2Macchabeorum 15-23 “mitte angelum tuum bonum ante nos in timore et tremore magnitudinis brachii tui.” 『マカバイ記二』 十五—二三「あなたの大きな腕によって敵を恐れ震えさせるために、わたしたちの前に善き御使いをお送り下さい」。
- [I Samuhel, 2-1. “exaltatum est cornu meum in Domino” 『サムエル記上』 二—一「主にあってわたしは角を高く上げる」。
- 10) [P] ここから、ポーランドの司教達も出征に参加したこと、また軍隊の編成も、多少とも教区に対応した地域に従ってなされたということが窺える。
- 11) [M] ツイドリーナ川に注ぎ込むトルティナ川における戦。『コスマの年代記』第三卷第三十六章はそれを描いている。
- 12) [M] Isaias, 40-11. “sicut pastor gregem suum pascet.” 『イザヤ書』 四十一—一一「羊飼いとて群れを養い」。
- 13) [P] 聖ヴォイチェフに捧げられたグニエズノの部隊。おそらく、グニエズノの大司教の部隊が念頭にあるのであろう。
- 14) [P] 酌頭の仕事への暗喩。ディエルジクが誰かは不明である。
- 15) [M] Isaias, 59-17 “et galea salutis in capite ejus.” 『イザヤ書』 五九—一七「救いとして兜をかぶり」。
- 16) [B] 二重音節の脚韻をもった三連のトロカイックの詩。

- 17) [M] Ilias latina. 482 “sanguine manet humus, campi sudore madescunt.”『イリアス（ラテン訳）』四八二「大地に血は流れ、野は汗で濡れる」。
- 18) [M] Genesis. 49-27. “Benjamin lupus rapax.”『創世記』四九一二七「ベニヤミンは強欲な狼」。
- 19) [M] これは、おそらく『コスマの年代記』第三卷第三十六章で述べている、ブザの息子デトリセクの率いる部隊であった。
- 20) [M] すなわち宮中伯の軍隊。
- 21) [M] Vergilius, *Georgics* I-511. “saevit toto Mars impius orbe.”ヴェルギリウス『農耕詩』一巻一五……「非道なマルスが全地を暴れ回る」。
- 22) [B] 欠陥のあるヘクサメトロの詩。
- 23) [P] 上述の箇所は、古代ギリシャ、ローマの諸々の表象から取られた神話の知識の奇妙な混合から成り立っている。マルスは戦の神であった。パルク達は、人間の生活を監視する神々であった。ツェルベルは、三つの頭を持った犬であり（そこから大食の口を持つ、ということが由来する）、黄泉の国の入口の番犬である、アケロン（黄泉の国の川。死者の魂はこれを渡ってその国へ入る）の渡し守はカロンである。プロセルピーナはプルートの妻であり、黄泉の国の女王であるが、いまだかつて嘲笑する者として紹介されたことはなかった。フリアとエウメニデスは、同じ復讐の神のラテン名でありギリシャ名である。彼らは蛇の衣を身につけていたのではなく、その髪が蛇であった。彼らの硫黄の浴場も、蛇の歯と竜の舌からできている冠と同様に古代の神話の産物ではない。年代記作者はこの冠の作成をキクロペスに負わせているが、古代の神話は、彼らをプルートの僕にせず、ブルカンの僕にしている。
- 24) [M] 十五音節トロカイックの詩。

第二十四章 ポーランド人によるプルスの地の寇掠

さて、疲れを知らないボレスワフは、冬の季節に、怠惰な人が閑暇のうちに身を休めるのとはちがって、氷結した隣の北国プルスへ攻め入った。蛮族を征服せんとしたローマの元首ですら、備えのある砦の中で冬を越し、冬の間は決して戦をすることはなかったのに²⁾。

さて、この地に赴いた時、ボレスワフは湖や沼の水を橋として利用した。というのは、その国においては、誰も湖や沼を除いては、その国への入口をどこにも見つけることができなかったからである。こうしてボレスワフは、湖と沼を渡り、人の住む土地に入ったのであるが、一つの場所に留らず、砦も町も包囲しなかった。というのは、そこには何もなかったからである。実際、この地方は、地勢や自然的条件において、湖と沼に守られた島のようにあり、世襲的な割当地が農民や住民に配分されていた³⁾。

さて、戦好きのボレスワフは、この野蛮な国を到るところ駆け巡り、夥しい戦利品を集め、成年の男女や少年少女、男女の奴隷や奴婢を数えきれない程多く捕え、多くの建物と村々を焼い払い、戦を交えることなく、これらすべての戦利品を奪ってポーランドに帰った。もっとも、戦こそこれらすべてのものに勝って彼が願っていたものであったが。

(24) CAPITULUM DE VASTACIONE TERRE PRUSSIE PER POLONOS

Item inpiger Bolezlauus yemali tempore¹⁾ non quasi desidiosus in otio requieuit, : sed Prussiam terram aquiloni contiguam, : gelu constrictam, : introivit, : cum etiam Romani principes : in barbaris nationibus debellantes, : in preparatis munitiōibus yemarent, : neque tota yeme militarent²⁾. : Illuce enim introiens, glacie lacuum et paludum pro ponte utebatur, : quia nullus aditus alius in illam patriam nisi lacubus et paludibus inuenitur. : Qui cum lacus et paludes pertransisset : et in terram habitabilem pervenisset, : non in uno loco resedit, : non castella, non civitates, quia ibi nulla, sibi obsedit, : § quippe situ loci et naturali positione regio ista per insulas lacubus et paludibus est munita : et per sortes hereditarias ruricolis et habitatoribus dispartita³⁾ : Igitur belliger Bolezlauus per illam barbaram nationem passim discurens predam inmensam cepit, : viros et mulieres, pueros et puellas, : servos et ancillas : innumerabiles captivavit, : edificia villasque multas concremavit, : cum quibus omnibus in Poloniam sine prelio remeavit, : quod prelium tamen invenire plus hiis omnibus exoptavit. :

九
一

- 1) [M] 一一一〇年から一一一一年にかけての冬、Maleczynski, *Bolesław Krzymousty* p. 98.
- 2) [P] ローマの軍隊が冬の陣営において、要塞化した砦の中を越冬するという記述は、しばしばカエサルの『ガリア戦記』に登場するところである。しかし年代記作者がこの作品を念頭においていたかどうかは不明である。
- 3) [P] “sortes”-“żreby”「割当地」——この箇所は、第二巻第四十二章とともに我々に、古いプランスの社会的政治的構造について、貴重な、また極めて古い情報を提供している。

第二十五章 ボレスワフとズビグニエフとの偽の和解について

こうして、前に述べたように、ボレスワフは敵を鎮圧したあと、ボヘミア公に対して²⁾、以前に言及したボヘミア公の一番下の弟に²⁾若干の町を与えること、また彼を世襲地に受け入れることを強要した³⁾。このことがなされた時、ズビグニエフは弟ボレスワフに使者を送り、ボヘミア公がその弟にしたように、自分に父の世襲地の一部分を譲ってくれるように恭しく懇請し、さらにこの他の点では決してボレスワフと同等の地位を持つことなく、騎士が君主に対するように、常に、そしてあらゆる点で弟に従う、という約束を付け加えた。というのは、ズビグニエフはすでに、皇帝によっても、ボヘミア人によっても、ポモジャ人によっても勝利を取ることができないと悟り、力や武器によって手に入れることができなかつたものを、謙遜と兄弟愛に訴えることによって得ようとしたからである。確かにこれらの言葉は立派で穩かであるように思われた。しかし言葉に表わされたものと胸の中に隠されたものとはおそらく別のものであった⁴⁾。しかしこの点について述べることはしるべき場所を取っておくこととして、ボレスワフの返答について耳を傾けよう。

ボレスワフは、非常に謙った兄の嘆願のうわさを聞いた時、何度もくりかえされた偽誓、幾度も蒙った不義不正、ポーランドへ外国人を引き込み、その案内人となったことをも忘れ、自分の怒りを和げ、ズビグニエフを、以下のような条件の下にポーランドに呼び戻した。その条件とは、ズビグニエフの謙遜の心が使者の言葉に違わず、ズビグニエフが自らを君主でなく、騎士身分の者と見做し、以後も引き続きいかなる傲慢な態度も、またいかなる君主権力をも誇示しなければ、兄弟愛にもとづいて若干の城を彼に与える、というものであった⁵⁾。さらにまた、ズビグニエフの中に、真の謙遜の心と真実の愛情が認められるならば、常に一日また一日と彼の地位を引き上げるが、それとは逆に、心の中に以前の慢心と不和を隠していれば、公然たる不和対立の方が再びポーランドに新たな分裂が生じるよりもましであろう、というものであった。

しかしながら、ズビグニエフは、愚かな人々の唆しに身を委ね⁶⁾、服従と謙譲の約束をほとんど意に介さず、ボレスワフのもとへ謙った態度ではなく、

不遜な態度でやってきた。それは永年の追放によって罰せられ、多くの労苦と不幸によって疲れ切った人の態度ではなく⁷⁾、むしろ、一国の君主のように、自分の前に剣を持たせ⁸⁾、太鼓やツィターを奏でる楽団を先行させ⁹⁾、自らを、臣従する者でなく統治する者として誇示し、自ら弟の下に軍役奉仕する者でなく、弟の上に命令する者として振舞った。しかしこの出来事は、賢人達によって¹⁰⁾ズビグニエフがおそらく考えたこととは別の方向に解釈された。彼らはポレスワフに以下のような忠告を与えたが、ポレスワフはそれを信じたことをすぐに後悔し、またその忠告を実行に移したことをいつも悔やむことになった。すなわち、彼らは次のような言葉によってポレスワフの人間的な感情¹¹⁾を揺り動かしたのである。「ズビグニエフという人物は、非常に大きな不幸によって打ち砕かれ、長い流刑によって国を追われていたので、はじめての接見の時にも、今なお個々の問題について確信が持てなかったにもかかわらず、非常な高慢と尊大の心を抱いて登場した。もしも彼にポーランド王国の若干の権力を譲ることになったら、将来彼は何をするであろうか。」と。彼らのうちの一人はさらに、より危険な内容を付け加えた。すなわち、ズビグニエフは、ある氏族出の者を見つけ出し、彼が裕福な者であるか否かにかかわらず、その人物とある約束を取り決め、適当な時に小刀か何かの鉄片でポレスワフを刺し殺し、しかもその時、殺害者自身が死の危険を免れていたなら、彼に大いなる名誉を与え、彼を公としての地位に引き上げるという約束をした、というのである。しかし我々はその企てが、非常に憶病で非常に単純なズビグニエフ自身によって考え出されたというよりは、邪悪な助言者によって考案されたと信じたい。

八九

それゆえまた、国の統治の任にある血気盛んな年頃の若者が、死の危険から身を避け、すべての奸計を退けて安泰に統治していくために、怒りに駆られて、しかも賢人達の忠告に従って、何らかの非行¹²⁾を行ったとしても決して不思議なことはないであろう。しかしながら、誰もこの罪が、唆しによってではなく、また無鉄砲な衝動から、また熟慮からではなく、事の成り行き¹³⁾からなされたことと考えるべきではないであろう。というのは、もしもズビグニエフが、虚栄の束桿をふりかざして君臨する君主のようではなく、同情を懇請する人のように謙った態度でポーランドに戻ってきたら、ポレスワフ自らも回復しえない程の災いに陥ることもなかったであろうし、他人を痛まし

い罪に陥れることもなかったであろう。それではこれからどうすればよいのだろうか。ズビグニエフを責め、ボレスワフを弁護すべきであろうか¹⁴⁾。決してそうではあるまい。軽率な怒りと事の成り行きから犯された罪の方が、熟慮の上で犯された罪よりも小さい。しかしながら、我々はまた、故意に犯された罪に対しても懺悔を拒まず、この懺悔においても、人格と年齢と将来性を考慮に入れる。というのは、一度犯された、取り返しのつかない悪から、再びさらに大きな悪が生じないようにすべにであり¹⁵⁾、また医者や、治癒する人を、適切な治療法によって救うべきであるから。それゆえ、一方において遂行されてしまった事柄は元の状態にもどすことができないのであるから、病弱ではあるが、まだ治癒する他方の者を、賢明な注意深い配慮によって名誉ある地位に保っておくことは必要なことであろう¹⁶⁾。肉体的に病弱者には肉体的な援助を施さねばならないが、それと同じように、霊的に弱者を霊的な薬によって支えねばならないことは、よく知られたことである¹⁷⁾。従って我々は、ボレスワフを、彼がこのような事柄を行ったという点において非難しつつも、その身にふさわしい懺悔を行い、非常に謙った態度を表したという点においてボレスワフを称賛しようと思う。

確かに我々は、はじめての¹⁸⁾四十日間の断食を行い、断えず灰の中に居て粗布をまとい¹⁹⁾、地に伏し、涙と嘆息で濡れ、人との交わりも会話も断ち²⁰⁾、地面を食卓とし、藁を食卓の布とし、黒パンを食物、水を酒と見做した、このような優れた人物、このような君主、このような立派な若者を、まさにこの目で見たのである²¹⁾。さらに、司教、修道院長、司祭達は、各々そのミサと断食によって、分相応に彼を助け、すべての特別の祝祭日には⁽²²⁾、とりわけ教会の聖別式において、教会法の権威にもとづいて、幾分彼の断食を軽くした。さらに彼自身は、毎日罪人や死者のためにミサを催し、詩編を歌わせ、貧しい人々に食事と衣類を恵むことによって大いなる慈悲の心をもって彼らを慰めた。しかし、これらすべてのことに勝って懺悔にとって特別に意義あることと思われるのは、主の権威ある命令に従って²³⁾、ボレスワフが兄の心を満たし、赦しと和解を得たことである²⁴⁾。またボレスワフは、懺悔から、極めて重要なもう一つの果実を引き出した。それは、このように強大な君主の行ったこととしては、すべての懺悔人の模範とみなしうるものである。

確かに、公国でなく、自ら大きな王国を統治し、またキリスト教国、異教

国を問わず敵対する様々な国について不安を抱きながら、自らと自らの保護すべき王国とを神の権能に委ね、会見の機会に²⁵⁾、大いなる敬虔の心を抱いて聖エギディウスと聖ステファン王への巡礼の旅に出たのである²⁶⁾。しかもこのことをボレスワフはわずかな人々に告げただけであった²⁷⁾。

もし、巡礼にともなうこのような大きな労苦について、分別ある司教と修道院長が、その慈愛に満ちた好意から、そのミサと祈禱によってこの断食を中断させることがなかったならば、ボレスワフはこの断食の四十日間のすべての日々²⁸⁾、ただ水とパンからなる食事に満足して、断食を続けたであろう。また日々宿泊所から長い時間をかけて司教や司祭達とともに足で歩き、また時には素足で歩行し²⁹⁾、その間、永遠の処女マリアのための祈禱と³⁰⁾一日の時禱と、また連禱とともに詩編の懺悔のための七つの詩を唱え、またしばしば死者のための徹夜の祈りのあとに詩編の一つを付け加えた。そしてこの巡礼の道中すべてにおいて、貧者の足を洗い、喜捨を施すことに大変な敬虔と熱意を示したので、彼に助けを求めようとした貧しい人で、それを得ることなく立ち去った人は誰もいなかった。どの場所であれ、北の公³¹⁾が司教座や修道院や司教座聖堂主席司祭のいる場所に到着すると、当地の司教や修道院長や司教座聖堂主席司祭や、また二・三度はハンガリア王コロマン自身が、整列した行列を従えてボレスワフを出迎えた。他方、ボレスワフ自身は、常にどこでも教会に対して、なにがしかの贈物を献げたが、主要な場所には、ただ金と高価な衣だけを贈った。そしてハンガリア全土を通じて、ボレスワフは宗教的、霊的な点においても司教や修道院長や司教座主席司祭によって恭して受け入れられたが、世俗的な奉仕の点においても、彼らによって心を込めた備えが用意された。ボレスワフも彼らに贈物を与え、他方彼自身も彼らから贈物を受け取った。王や家臣や僕達はどこへでも彼に随行し、王の服心の者は、どこでボレスワフが心よく持て成され、またどこで不愛想に受け入れられたかを観察し、王に報告した。ボレスワフを温く、また恭しく迎えたと思われる人は誰でも、王の友となり、疑いもなく王の恩顧を得ることができると言われた。

八七

さて、ボレスワフは、このように深い霊的献身と、このように大きな世俗上の敬意を受けて巡礼から帰ったが、自分の王国に帰っても、懺悔の生活と巡礼の慣行を止めず、主の復活祭を祝うために、再び同じ巡礼の企てを抱い

て、福者、殉教者アダルベルトの墓へと赴いた³²⁾。一日また一日と聖殉教者の場所³³⁾に近づけば近づく程、それだけますます敬虔な心を抱き、涙と祈りの中を素足で進んでいった。聖なる殉教者の町と墓に着いた時、どれ程の喜捨が貧者に施されたことか。また教会においては、その祭壇にどれ程の豪華な品々が供えられたことか。彼の行いの証として、一つの黄金の品が存在しているが、それはボレスワフが自分の敬虔な信仰と懺悔の印として、聖なる殉教者の聖遺物に寄贈したものである。その棺は、その値において金と劣らない真珠や貴金属の他に純金80マルク³⁴⁾を含んでおり、また司教や諸侯、司祭、司祭、数え切れない程多くの騎士に対して、聖なる復活祭の儀式を大変豪勢に、物惜しみせずに催し³⁵⁾、有力者達にも、また有力者でない者にも、一人一人高価な衣を与えた。また神聖な殉教者の参事会員や教会の監督や従僕や町の市民に対しては、以下のような気前のよい布告を出した。すなわち、すべての者は例外なくその身分と地位に応じて衣や馬やその他の贈物を受けとる名誉に浴する、と。

こうして、この巡礼は、敬虔な信仰心によって成就されたのであるが、しかしこの事柄は、前に語られた城攻めの話³⁶⁾を我々の記憶の中心から消し去るものではない。誰であっても、こうした話し方を転倒した順序³⁷⁾と考えるはずはないであろう。なぜならもしその城攻めの話を挿入したとすれば、始められた物語の秩序を乱すことになったであろうから。

(25) CAPITULUM DE CONCORDIA ZBIGNEY FALSA CUM BOLEZLAO

Hostibus itaque Bolezlauus, sicut dictum est, refrenatis, : ducem Bohemicum¹⁾ coegit fratrem minimum²⁾, quem supra diximus in hereditatis sortem recipere, quibusdam civitatibus sibi datis³⁾ : Quo facto Zbigneus Bolezlauo fratri suo legationem misit misericorditer supplicando, quatinus aliquam particulam hereditatis paterne, sicut dux Bohemorum suo fratri, sibi quoque concederet, : ea condicione, quod nullatenus in aliquibus illi coequaret, : sed sicut miles domino semper et in omnibus obediret. : Iam enim nec per cesarem, nec per Bohemos, nec per Pomoranos se posse vincere confidebat, : sed quod viribus et armis obtinere non

poterat, : humilitate saltim et fraterna karitate presumebat. : Verba quidem satis bona et pacifica videbantur, : sed aliud promptum in lingua forsitan et aliud clausum in pectore tenebatur⁴⁾ : Sed hec dicenda suo loco differamus, : et Bolezlai responsionem audiamus. : § Audita fama fratris tam humillima supplicatione, Bolezlaus a periuriis tot transactis, : ab iniuriis tot illatis, : ab alienis gentibus in Poloniam introductis : ignoscendo, suum animum mitigavit : et Zbigneum cum verbis huiusmodi condicionis in Poloniam revocavit ; : videlicet si verbis sue legacionis mens humilis concordaret : et si se pro milite non pro domino reputaret, : nec ullam superbiam deinceps, nec ullum dominium ostentaret, : fraterna karitate quedam castella sibi daret⁵⁾ : Et si veram humilitatem : in eo veramque karitatem : prospiceret, : semper eum in melius die cottidie promoveret ; : sin vero contumaciam illam antiquam in corde discordiam occultaret, : melius esset apertam discordiam, quam iterum novam seditionem in Poloniam reportaret. : At Zbigneus stultorum consiliis acquiescens⁶⁾ promissae subieccionis et humilitatis minime recordatus, : ad Bolezlaum non humiliter sed arroganter est ingressus, : nec sicut homo longo tam exilio castigatus, : tantisque laboribus et miseriis fatigatus⁷⁾. : ymmo sicut dominus cum ense precedente⁸⁾, : cum symphonia musicorum tympanis et cytharis⁹⁾ modulantium precinente, : non se servitutum sed regnaturum : designabat, : non se sub fratre militaturum, : sed super fratrem imperaturum : pretendebat : § Quod quidam sapientes in partem aliam, quam Zbigneus forsitan cogitaverat, moverunt¹⁰⁾ : et consilium Bolezlauro tale suggererunt, : quod se statim credidisse penituit, : semperque se fecisse penitebit ; : talibus videlicet verbis mentem humanam¹¹⁾ accendentes : § Hic homo tantis calamitatibus contritus, : tam longo exilio detrusus, : aditu primo cum tanto fastu superbie de singulis adhuc incertus : ingreditur ; : quid faciet in futuro, si sibi potestas aliqua de regno Polonie concedatur : Aliud quoque maius et periculosius asserentes, quod ipse videlicet Zbigneus quemlibet cuiusque generis, divitem sive pauperem, iam repertum et constitutum haberet, : qui Bolezlaum oportuno sibi loco considerato vel cultello vel alio quolibet ferramento confoderet ; : quem homicidam ipse, si tunc mortis periculum evitaret, : honoris magni culmine sicut unum de principibus exaltaret. : Sed nos magis credimus ab ipsis malis consiliatoribus hoc fuisse :

machinatum, : quam umquam ab ipso Zbigneuo, satis humili : satisque simplici : tale facinus cogitatum. : § Ideoque minus miradum iuvenem etate florentem, : in imperio consistentem, : iracundia stimulante, : sapientum quoque consilio suggerente, : quodibet facinus¹²⁾ perpetrare, : quo mortis periculum evitaret : et securus a cunctis insidiis imperaret. : Nullus tamen credat illud peccatum inspiratione fuisse perpetratum, : sed ex presumptione, : non ex deliberatione, : sed ex occasione¹³⁾ : propagatum. : Si enim Zbigneus humiliter et sapienter adveniret, sicut homo misericordiam petiturus, : non sicut dominus quasi vanitatis fascibus regnaturus, : nec ipsemet in dampnum irreparabile corruiet, : nec alios in crimen lamentabile posuisset. : Quid ergo ? Accusamus Zbigneuum : et excusamus Bolezlauum¹⁴⁾ ? Nequaquam. Sed minus est peccatum ira precipitacionis ex occasione data perpetrare, : quam illud faciendum ipsa deliberatione pertractare. : Nos vero nec peccato deliberationis penitentiam denegamus, : sed in penitentia tamen personam, etatem, oportunitatem perpendamus. : Non enim convenit post malum irreparabiliter perpetratum malum peius evenire¹⁵⁾ : sed illi, qui sanari potest, decet medicum discretionis medicamine subvenire. : § Quapropter, quia quod factum est in altera parte non potest in statum pristinum restaurari, : oportet partem infirmam, medicine capacem, in statu dignitatis vigilanti studio discrecionis conservari¹⁶⁾ : Unde constat infirmo corporaliter corporali subsidio ministrari : et infirmum (spiritualiter) spiritali medicamine sustentari¹⁷⁾. : Sed qui Bolezlauum in hoc, quod tale, quid egerit accusamus, : in hoc tamen, quod digne penituerit : et satis humiliaverit, : collaudamus. : Vidimus²¹⁾ enim talem virum, tantum principem, : tam deliciosum iuvenem : primam karinam¹⁸⁾ ieiunantem, : assidue (in) cinere et cilicio¹⁹⁾ humi provolutum, : lacrimosis suspiriis irrigatum, : ab humano consortio et colloquio separatum²⁰⁾ : humum pro mensa, herbam pro mantili, panem atrum pro deliciis, aquam pro nectare reputantem : § Preterea pontifices, abbates, presbiteri missis et ieiuniis eum quisque pro suis viribus adiuabant : et in omni sollempnitate precipua²²⁾ vel in ecclesiarum consecrationibus aliquid sibi de penitentia canonica auctoritate relaxabant. : Insuper ipse missas cottidie pro peccatis, pro defunctis celebrari, : psalteriaque cantari : faciebat : et in pasceendis et vestiendis pauperibus magne caritatis solatium impendebat. : §

Et quod maius hiis omnibus et precipuum in penitentia reputatur, : auctoritate dominica²³⁾ fratri suo satisfaciens, concessa venia concordatur²⁴⁾ : Unum quoque Bolezlauus fructum (tulit) penitentiae satis dignum, : quod potest reputari de tanto principe cunctis penitentibus quasi signum : § Nam cum ipse non ducatum, sed regnum magnificum gubernaret : ac de diveris et christianorum et paganorum nationibus hostium dubitaret, : semet ipsum regnumque suum servandum divinae potentiae commendavit : et iter peregrinationis ad sanctum Egidium : sanctumque regem Stephanum²⁶⁾ occasione colloqui²⁵⁾. paucissimis hoc rescientibus²⁷⁾ summa devotione consumavit : Omnibus quippe diebus illius quadragesime²⁸⁾ : sola contentus panis et aquae refectio : ieiunaret, : nisi tanti laboris occasione : discretio presulum et abbatum missis et orationibus illud ieiunium caritatis obsequio violaret. : § Singulis quoque diebus ab hospitio tam diu pedibus quandoque nudis²⁹⁾ : cum episcopis et capellanis : incedebat : donec horas perpetuae Virginis dieique canonicas³⁰⁾ VII quae psalmos cum letania penitentiales adimplebat : et plerumque cursum psalterii post defunctorum vigilias adiungebat. : In pedibus etiam pauperum ablucendis, : in elemosinis faciendis : ita devotus et studiosus per totam viam illius peregrinationis existeret, : quod nullus indigens : ab eo misericordiam querens : sine misericordia recedebat. : § Ad quemcumque locum episcopalem, vel abbaciam, vel preposituram dux septentrionalis³¹⁾ veniebat, : episcopus ipsius loci, vel abbas, vel prepositus et ipse rex Vngarorum Colummannus aliquociens obviam Bolezlauo cum ordinata processione procedebat. : Ipse autem Bolezlauus ubique semper aliquid per ecclesias offerebat, : sed in illis locis principalibus non nisi aurum et pallia proferebat. : Et sicut religiose per totam Vngariam ab episcopis et abbatibus et prepositis recipiebatur, : ita munifice sibi corporale servitium ab ipsis cum summa diligentia parabatur : et ipsos ipse donabat et ipse ab ipsis donabatur. : § Ubique tamen eum ministri regis et servitium sequebatur : et ubi Bolezlauus diligentius vel negligentius reciperebatur, : notificandum regi a suis familiaribus notabatur. : Et quicumque diligentius eum et honestius recipere videbatur, : amicus esse regis, vel gratiam inde consequi sine dubio dicebatur. : Cum tali devotione spiritali, : talique veneratione temporali : Bolezlauus de sua peregrinatione remeavit ; : neque tamen in regnum suum rediens vitam penitentis :

habitumque peregrinationis : abnegavit, : sed ad sepulchrum usque beati martiris Adalberti³²⁾, pascha Domini celebraturus, cum eodem peregrinationis proposito perduravit. : Et sicut cottidie propius ad locum sancti martiris³³⁾ accedebat, : tanto devotius cum lacrimis et orationibus nudis pedibus incedebat : Cum autem ad urbem et sepulchrum sancti martiris pervenisset, quantas elemosinas in pauperibus erogavit, : quanta per ecclesiam et in altaribus ornamenta presentavit, : opus aureum existit operationis argumentum, : quod fecit Bolezlaus reliquiis sancti martiris in sue devocionis et penitentiae testamentum. : § In illo namque feretro auri purissimi octoginta marce continentur³⁴⁾, : exceptis perlis gemmisque preciosis, que minoris quam aurum pretii non videntur. : In episcopis vero suis, : in principibus, : in capellanis, : in militibus innumeris ita magnifice ac munifice pascha sanctum illud gloriosissimum celebravit³⁵⁾, : quod singulos maiorum et pene minorum pretiosis vestibus adornavit. : § De canonicis autem beati martiris, : de custodibus ecclesie vel ministris, : vel de civibus ipsius civitatis ita liberaliter ordinavit, : quod omnes, nullo pretermisso, vel vestibus, : vel equis, vel aliis muneribus : unumquemque pro qualitate dignitatis et ordinis honoravit. : § Hac itaque peregrinatione : tam religiosa devocione : completa, : non ideo tamen est obsessio facta prius³⁶⁾, de cordis nostri memoria sic deleta, : § nec debet quisquam illud preposterum ordinem³⁷⁾ reputare, : quod, si fuerit intersertum, poterit cepte narrationis totam seriem perturbare. :

- 1) [P] ウァディスワフ公。
- 2) [P] ソビエスワフ。第三卷第二十章参照。
- 3) [P] ソビエスワフは実際に、兄から一一年、ジャテツ Žatec の城とそれに属する地方を受領した。『コスマの年代記』第三卷第三十七章参照。
- 4) [M] Sallust, *Bellum Catilinae*, 10-5, “aliud clausum in pectore aliud in lingua promptum habere.” サルスティウス『カティリナ戦記』十一五「胸の中に隠されたものと口に出すものとは別物」。
- 5) [P] 十三世紀の資料、『ヴィエルコポルスカ年代記』は、ズビグニエフはシェラツ地方に若干の砦を受領したと記している。
- 6) [P] ガルはつねに、全く我々には知られていない、ズビグニエフの邪な助言者の役割を強調している。
- 7) [M] Sallust, *Bellum Iugurthinum*, 76-5. “Romani multo ante labore proeliisque tatiigati,” サルスティウス『ユグルタ戦記』七六一五「労苦と戦で非常に疲れ切ったローマ人は」。
- 8) [P] 自分の前に剣を持たせることは、彼の上位権力たることの象徴であった。たと

- えば、一〇一三年のメルセブルグでのボレスワフ・フロブリヤ、一一三五年のボレスワフ・クシヴウスティのように、ドイツ皇帝の前でも、独立した権力を持った君主は荘重な行列において剣を持たせた。『ティトマルの年代記』第一卷第六章のイエドリッキの注参照。[訳注]このイエドリッキの注においては、逆にこの儀式が、剣を持たず者の地位の従属性を象徴するものであるとする見解も紹介されている (H. Zeissberg, R. Holtzman, 等)。Kronika Thietmara, M. Z. Jedlicki, Poznan' 1953.
- 9) [M] Iob, 21-12, "tenent tympanum et citharam," 『ヨブ記』二一——二二「太鼓や豎琴を奏でる」。
- 10) [P] 我々はこの「賢人達」の中にアウダンツィ家の人々の姿を見出すことができるだろう。
- 11) [P] "mentem humanam." 「人間的感情」。—— おそらく、「柔和で親切な面」と「人間的に欠陥のある、弱い面」との双方を含んでいるのであろう。
- 12) [P] "facinus" 「非行」—— ガルは自分の読者の前に、ズビグニエフの最後の運命について秘密にしている。彼と同時代の人々にとって、とくに年代記執筆の時期に、事件の直後においては事態を完全に明らかにすることは余計なことであった。なぜなら、すべての人が何が起ったかを知っていたからである。我々はコスマとヴィセンティから、ズビグニエフがポーランドに帰ってすぐに捕えられ、盲にされたことを知っている。その後について書かれているクシヴウスティの懺悔は、近親者殺害に対する典型的な懺悔である。
- 13) [P] "ex occasione" —— この句は、ラテン語のテキストにおいて、かならずしも意味が明らかでない。ポーランド語の訳 "pod wplywen okolicznosc" 「情勢の力におされて」 —— は、凡その意味を表わしているにすぎない。
- 14) [M] ガルはズビグニエフの悲劇的運命については一言も触れていない。『コスマの年代記』第三卷第三十四章は、一一一一〇年にズビグニエフは視覚を奪われたと明確に述べており、グロデツキもその点を確認している。Grodecki, *Gall* p. 169. グンプロヴィッチは、*Polens.* p. 94. で、ズビグニエフが盲にされたのは、一一一一一年だと述べている。バルゼルは *Genealogia* p. 117. ザグジェフスキは、"Okres do schytka XII w. p. 88" で、それはおそくとも一一一一二年ごろに生じた事件であると述べている。もしガルの最終章が書かれた時期を、グロデツキが想定した時期とすると、ズビグニエフは、一一一一二年の十二月二十五日 —— その日はボレスワフがボモジャから帰った日である —— の後で、またおそらく一一一一三年の四旬節の断食のはじまる前(二月一九日)に、盲にされた。この事件とその年代については Maleczyński, *Boleslaw Krzywousty* 46-49.
- 15) [P] "malum peius" —— "zlo jeszcze gorsze, 「さらに大きな悪」 —— これは、ポーランドにおいて、兄弟殺しの犯人たるクシヴウスティから王位を剝奪すべし、という声が存在していたことを示している。
- 16) [M] ボレスワフから王国を剝奪するという動きをこの箇所から推し量っていいだろうか。
- 17) [M] 聖ベネディクトの規則。
- 18) [P] "primam karinam ieiunatem" 「はじめての四十日間の断食」 —— この言葉の意味するところは次のようなものである。すなわち、以下に描かれる四十日間の断食は、はじめて重大な非行を犯した罪人に関わるものであり、再犯の者はさらに厳しい断食を課されることになる、というものである。
- 19) [M] Mattheus, 11-21" in cilicio et cinere paenitentiam egissent." 『マタイによ

- る福音書』十一—二十一「粗布をまとい、灰をかぶって悔い改めたにちがいない」。また同様に『ルカによる福音書』十一—三を典拠とする。
- 20) [M] このような懺悔のあり方から、ボレスワフは大司教マルチンによって、兄弟殺しの故に確門されたという推定がなりたつかもしいない。
- 21) [訳注] “vidimus”「見た」——この言葉をめぐって、見解が分れている。プレジァは「目撃する」「この目で見ると」と解し、作者ガルがボレスワフの懺悔の場にいあわせたと主張するが、マレチンスキ、St. ケンチシンスキはそれを否定する。St. Kętrzyniski, “Gall-Anonim i jego Kronika,” in *Rozprawy Polskiej Akademii Umiejętności* 1898.
- 22) [M] とくにエビファニア祭（御公現の大祝日）と聖母マリアお潔めの祝日。
- 23) [P] “auctoritate dominica”「主の権威ある命に従って」——『マタイによる福音書』五一—二三に依る。「だから、あなたが祭壇に供え物を献げようとし、兄弟が自分に反感を持っているのをそこで思い出したなら、その供え物を祭壇の前に置き、まず行って兄弟と仲直りをし、それから帰って来て、供え物を献げなさい」。
- 24) [P] ここから、次のことが推測される。すなわち、ズビグニエフは、刑の執行後もなお一定の期間生きていたこと、また死ぬ前にボレスワフとの間に一定の和解が生れたということ、である。
- 25) [M] ボレスワフは、故意にコロマンと会見したように思われるが、それは、大司教マルチンが決めたボレスワフの破門を解くための協議をコロマンと共同で行うためであったと思われる。
- 26) [M] ハンガリア北部のスミギエンシス修道院（ソモギヴァール Somogyvár）。ここにハンガリア王ウァディスワフによって建立された聖エギディウスの修道院があった。聖ステファンへの巡礼とは、中部ハンガリアのピアウォグロッド Białogród の巡礼地。後にバゾアリウム Bozoavium と呼ばれた。
- 27) [M] このコロマンとの会見で何がなされたか、については、ガルは尚書官ミハウから聞くことができた。
- 28) [P] すなわち、一一一三年の二月十九日から同年四月五日まで。
- 29) [M] II Samuhel, 15-30. “David ascendeabat……nudis pedibus incedens.”『サムエル記下』十五—三〇「ダビデは、はだして歩いて……登っていった。」
- 30) [P] 「永遠の処女マリアのための祈禱」——クシヴウスティが特に好んだ礼拝式。
- 31) [P] ボレスワフ・クシヴウスティ。
- 32) [B] アダルベルトの聖遺物は一〇三九年九月一日より今日までブラハに存在している。グニエズノからブラハへそれが移された過程の詳しい描写は『コマスの年代記』第二卷第三章から第五章の記述の中に見ることができる。グニエズノのアダルベルトの墓は、聖遺物のブラハへの移転の後、聖なる場所として、多くの崇敬を集めていた。
- 33) [P] “ad locum sancti martiris.”——すなわちチシェメシノ Trzemeszno へ。
- 34) [P] 約十六キログラム。
- 35) [P] 一一一三年四月六日。
- 36) [P] この城攻めは、一一一二年の秋に行われた。
- 37) [P] 中世の理論は、歴史家に事件をそれが生じた順番に、すなわち主題に即した形でなく年代的に正確に述べることを要求した。

第二十六章 ポモジャ人はポーランド人にナクウォの城を引き渡した

すでに述べたように、ナクウォの城をめぐる、大きな戦が行われ¹⁾、それ以来、この城は、つねにポーランド人に損害と災難を与えつづけてきたが、ボレスワフは、自分の縁者のシフィエントポウクという名のポモジャ人が²⁾、以下のような忠誠の約束の下に、他の若干の城とともにこのナクウォの城を保有することを認めた。その約束というのは、いかなる理由があろうと、ボレスワフに対して決して自分の奉仕義務を忘れず、城の守りを放棄してはならないというものであった。しかしその後、彼は誓った忠誠義務を守らず、約束した奉仕義務を履行せず、来訪したポーランド人に城の門を開かなかつた。それはあたかも二心ある敵や裏切者が、力と武器で自分と自分達の味方を守るかのような態度であった。そこで北の公ボレスワフは激しく怒り、歴戦の強者ぞろいの部隊を召集し、受けた恥辱に報いんとして、攻め難く堅固な城ナクウォを包囲した。そしてその地に、聖ミカエルの祭日から主の生誕の日まで対陣し³⁾、毎日激しく城を攻めたてた。しかしこれらの労苦は全く無駄骨に終わった。というのは、水と沼の多いこの地の湿った土地柄は、攻城機や武具を運び入れるのを許さなかったからである。さらに、この城には兵力においても物資においても非常に堅固な備えがあり、武器で攻めても、また兵糧攻めにしても、一年ではこの城を落とすことができなかつたであろう。ボレスワフ自身もその場で矢に当って傷を負ったので、自ら復讐を果そうとして、激しい怒りに我を忘れて攻撃した。それゆえシフィエントポウクは、ボレスワフの友や彼と親しい人物を介して、和睦か何らかの協定を常に探りつづけ、彼らに多くの金銭と人質を差し出した。ボレスワフはこれらの点を考慮して城の包囲を解き、再び戻ってくるための、また自ら蒙った恥を雪ぐための好機を待つことにして国に帰った。そして金の一部とシフィエントポウクの長子を入質として連れ去った⁴⁾。

七
九

さて、次の年⁵⁾、シフィエントポウクが決められた約束も、結ばれた協定をも遵守せず、また自分の息子の危険を思わず、定められた会見の場に赴くことも、釈明の理由書を送ることも考えなかつたので、ボレスワフは自分の軍勢を召集して、不実な敵をある程度まで鉄の杖で打った⁶⁾。しかしそれは完膚

なきまでという程ではなかった。ポレスワフがポモジェの国境に到着した時、そこに多くの軍勢を率いてきた他の君侯達は誰も皆、恐れを抱いて戦をためらっていた。そこでポレスワフは軍勢をそこに残し、選り抜かれた騎士を率いて前進し、ヴィシェグラドという砦⁷⁾の者達が、戦を予想して砦の前面を固めてしまわないうちにこの砦を急襲しようと企てた。さて軍勢は、一つの川に到ったが⁸⁾、この川は、ヴィスワ川と合流し、二つの川の三角地点にあるこの砦を反対の側からも軍勢から隔てていた。一方において、軍勢はすばやくこの川をつぎつぎに泳ぎ渡ったが、他方においても、マゾフシェやその他の兵士達は船でヴィスワ川を渡った。このような状況の下では、不案内のため多くの損害が同士討ちによって生じたが、それは、この砦の八日間にわたる攻囲戦において敵から受けた損害を上回るものであった。最後に、全軍が砦の回りに結集し、砦を攻め落すための様々な攻城機を用意した時、砦の者は、敵に対するポレスワフの厳しい意志を恐れて、身の安全の保証を得たうえで砦を引き渡し、このようにしてポレスワフの攻撃と自らの死を回避した。こうしてポレスワフは八日間でこの砦を占領したが、次の八日間で、この砦を自分の手の内に確保しておくためにそこに留まり、砦の守りを固めた。しかしポレスワフは守備隊をその砦に残して、自らはさらに前進し、又別の砦を包囲した⁹⁾。

しかしながら、ポレスワフは、前よりも多くの労苦と前よりも長い時間をかけてこの砦を攻め落した。というのは、ポレスワフは、この砦を急襲した時、この砦には、前よりも多くの兵士がいて、しかも兵士の力も前よりも屈強であり、防備も前よりも堅固であることを知ったからである。そこでポーランド人が攻城機や種々の武具を用意すると、ポモジャ人も同様に、反撃のためのあらゆる種類の道具を作った。ポーランド人が、木の櫓を砦の近くにまっすぐに、また滑らかに寄せるために、くぼ地を平らにし、土や木材を運び込むと、ポモジャ人は獣脂と松やにを用意して、積み上げられた木材を少しづつ焼やした。砦の者は、ひそかに三度城壁から出て、すべての城攻めの道具を焼き払った。ポーランド人も三度、それらを建てなおした。このようにポレスワフの陣営の木の櫓が砦の近くに立ったので、砦の兵士達は、小さな杭、武器、火を放って応戦した。ポーランド人が砦を武器、火、石で攻めたてると、砦の者も同様にあらゆる方法で逆撃した。砦の者は、ポーランド

人の多くの者を矢や石で傷つけたが、ポーランド人は日々砦の者をさらに多く打ち殺した。そこで異教徒は、戦の場で捕えられた時には死を覚悟し、首を差し出して怯懦のうちに死ぬよりも、名誉のうちに砦を守って倒れた方がよいと考えた。しかしながら、彼らは、ある時にはボレスワフと和平を結び、砦を引き渡そうとも考えた。が、またある時には、休戦を請うか、あるいは援軍を待って、砦の引き渡しの決定を先に延ばした。その間、ポーランド人は決して休まず、決して無為に流れず、労苦と夜番によって疲れてはいたが、持ち場を退かず、砦を力づくで、あるいは策略で攻め落とそうと力を尽した¹⁰⁾。こうして、ポモジャ人は、結局、ボレスワフの決意を知り、砦を引き渡す以外にはボレスワフの手を逃れることはできないと悟った。また自分達の君主であるシフイェントポウクからいかなる援助も得られないのではないかと、思って大きな疑惑に陥った。このような事情の下に、双方にとって時宜にかなった協定が結ばれた¹¹⁾。砦の者は生命の安全を約束されて砦を明け渡し、自らも無事にすべてのものを持って無傷のままに、好む方向に立ち去っていった¹²⁾。

[年代記の記述はここで終わっている。]

(26) POMORANI TRADIDERUNT CASTRUM NAKEL POLONIS

Igitur castrum Nakel, ubi prelium illud fuisse maximum superius memoratur¹⁾; et unde dampnum semper Polonis laborque continuus generatur, : Bolezlauus cuidam Pomorano, : genere sibi propinquo, : Suatopolc²⁾ vocabulo, : concesserat cum aliis castellis pluribus sub tali fidelitatis condicione retinere, : quod nunquam deberet ei suum servitium vel castella, causa pro qualibet, prohibere. : Sed postea numquam iuratam sibi fidelitatem retinuit, : neque promissam servitutem exhibuit, : neque venientibus portas castellorum aperuit, : ymmo sicut perfidus hostis et traditor viribus et armis sua seseque prohibuit. : § Unde Bolezlaus dux septentrionalis ad iracundiam concitatus, : convocatis bellatorum cohortibus, castrum Nakel fortissimum obsedit, suam vindicare contumeliam

meditatus. : Ibiq̄ue de festo sancti Michaelis ad Nativitatem usque
 dominicam³⁾ sedens : et in bello contra castrum cottidie studiosus
 incedens. : laborem suum in vanum penitus expendebat. : quia humidum
 per locum. : aquosum et paludosum : machinas et instrumenta ducere non
 sinebat. : Insuper castellum erat et viris et rebus necessariis sic firmatum.
 : quod non esset armis vel necessitate rei cuiuslibet per annum continuum
 expugnatum : § Ipse quoque Bolezlauus. cum ibi fuerit sagittatus. : ad se
 vindicandum est maioris ire stimulis agitatus : Unde Suatopolc pacem
 semper vel pactum aliquod per amicos et familiares Bolezlai requirebat
 : et pecuniam illi magnam cum obsidibus offerebat. : Quibus rebus per-
 pensis. Bolezlauus obsessionem dimisit. : redeundi. : suamque
 contumeliam vindicandi : tempus ydoneum expectando remeavit. : par-
 temque pecunie secum obsidemque filium ipsius primogenitum⁴⁾
 asportavit. : Item anno sequenti⁵⁾ cum ipse Suatopolc neque fidem datam
 : neque pactionem factam : observaret. : neque de periculo filii
 cogitaret. : nec ad colloquium cum Bolezlauo constitutum venire. : vel
 causam excusacionis mittere : procuraret. : suum Bolezlauus exercitum
 congregavit. : hostemque perfidum aliquantulum in virga ferrea⁶⁾ sed non
 plenarie. visitavit. : Qui cum ad confinium Pomoranie pervenisset. : ubi
 quilibet princeps alius cum tota multitudine timuisset. : exercitu relicto
 cum electis militibus in antea properavit : et castellum Wysegrad⁷⁾
 impetuose capere. castellanis non premeditantibus. nec premunitis.
 cogitavit. : § Ubi vero ventum est ad fluvium⁸⁾ qui iunctus Wisle flumini.
 castellum illud in angulo situm fluviorum ab eis ex altera parte dividebat.
 : alii fluvium illum cursim. alius ante alium. transnatabant : alii vere
 Mazouiensium per Wislam fluvium navigio veniebant. : Sicque contigit
 ignoranter in bello dampnum fieri plus civili. : quam VIII diebus
 expugnando castrum illud assultu : fuerat ex hostili. : § Exercitu tandem
 toto : circa castrum congregato. : iamque diversorum instrumentorum
 apparatu oppidi expugnandi preparato. : oppidani pertinacem in hostes
 obstinanciam Bolezlai metuentes. recepta fide dedicionem fecerunt. :
 sicque manus Bolezlai mortemque evaserunt. : Illud vero castrum Bolez-
 lauus VIII diebus acquisivit. : VIII que diebus aliis sibi retinendum. ibi
 residens. premunivit : : ibi derelictis presidiiis. inde progrediens. obsidione
 castrum aliud⁹⁾ circumivit. : Illud namque castrum cum maiori labore :

prolixiorique dilatione Bolezlauus expugnavit, : quia plures et forciores ibi pugnatores locumque municionem assultu bellico exprobat. : § Paratis igitur a Polonis instrumentis ac machinationibus expugnandi, : Pomorani similiter instrumenta modis omnibus repugnandi : (fecerunt). : § Poloni foveas equant, : terram lignaque comportant, : quo levius ac planius ad castrum cum turribus ligneis accedant ; : Pomorani contra lardum lignaque picea parant, : quibus paulatim congeriem illam comburant. : Tribus enim castellani vicibus instrumenta omnia de muro descendentes furtive combusserunt, : tribusque vicibus iterum illa Poloni construxerunt. : § Ita nempe turrets lignee Bolezlai castello vicine stabant, : quod castellani de propugnaculi cuneis armis et ignibus repugnabant. : § Si quandoque Poloni castellum armis, igne, lapidibus, sagittis inpetebant, : castellani similiter modis omnibus vicem contrariam rependebant : De Polonis multos castellani sagittis et lapidibus vulnerabant. : de castellanis vero Poloni plures cottidie periebant. : Erant enim pagani de morte securi, si virtute bellica caperentur, : et ideo malebant, ut cum fama se defendentes, : quam collum extendentes, : cum ignavia morerentur. : Interdum tamen cum Bolezlauo pactum facere : castrumque reddere : cogitabant, : interdum indutias petentes, : vel auxilium expectantes, : illud consilium differebant. : Interea Poloni nunquam ociosi, : nunquam desidiosi : tot laboribus et vigiliis fatigati (non) desistebant, : sed castrum capere (vi) vel insidiis insistebant.¹⁰⁾ : § Pomorani vero talem Bolezlai mentem et intencionem cognoscebant, : quod nullatenus evadere manus ipsius, nisi castro reddito, prevalebant, : et ex hoc quam maxime diffidebant, : quia de Suatopolc, suo domino, nullum auxilium expectabant. : Unde pro tempore consilium partibus utrique¹¹⁾ satis ydoneum inierunt, : castellum videlicet fide recepta tradiderunt, : ipsique sani cum suis omnibus incolumes, quo sibi libuit, abierunt¹²⁾ :

七
五

1) [P] 第三卷第一章参照。

2) [P] すでに第二卷第二十九章に登場する、ピアスト家の縁者のポモジャ人シフィエントボールとは別の人物。おそらくシフィエントボウクは、この人物の縁者か、あるいは近親者であろう。第二卷第二十九章の、「シフィエントボールの一族は、ポーランドの君主に対して忠実ではなかった」という文章は、このシフィエントボウクに関係しているかもしれない。ポーランドの年報(『聖十字架年報』)によれば、このシフ

イエントポウクは一一二二年に戦死した。

- 3) [P] 一一二二年の九月二九日から同年十二月二五日まで。
- 4) [P] シフィエントポウクの長子の名前は知られていない。若干の人々は、一一三五年に殺害されたヴァルチスワフ *Warcisław* を想定している。
- 5) [P] 一一一三年。おそらく晩春の、前章で描かれた巡礼が終わった頃（四月）。
- 6) [P] Psalm, 2-9. “pascas eos in virga ferrea ut vas figuli conteres eos.” 『詩編』二一九「お前は鉄の杖で彼らを治め、陶工が器を砕くように砕く」。
- 7) [P] ヴィスワ川沿いの今日のヴショグルッド *Wyszogród*。
- 8) [M] プルダ川 *Brda*。ヴィショグルッドの近くでヴィスワ川に注ぐ。Sallust, *Bellum Iugurthinum*, 91-1. “Denique sexto die, cum ad flumen ventum est.” サルスティアウス『ユグルタ戦記』九一一「六日目に川に到った時」。
- 9) [P] “castrum aliud” 「別の砦」—— おそらくナクウォであろう。というのは、ボレスワフは、前年に味わった失敗をとりかえすために、一一一三年に出征しているからである。ポーランドの諸々の年報も、一一一三年のナクウォの占領を記している。
- 10) [M] Sallust, *Bellum Iugurthinum*, 7-1. “neque per vim neque insidiis” サルスティアウス『ユグルタ戦記』七一一「力によっても策略によっても」。
- 11) [M] Caesar, *de Bello Gallico*, v-8. “consilium pro tempore et pro re” 「時宜にかなない、状況に応じた計画」。
- 12) [M] これが我々に残された年代記の最後の部分である。しかし第二十六章は、最終章として書かれたのではなく、また縮められて最終章になったものと考えべきでもない。というのは、ナクウォの砦の占領の叙述が残されているからである。おそらくこの作品の全体は四つの福音書と同様に四つの巻から構成されるはずであったと思われる。しかしカドゥベックは、彼の生きていた時代に、第四巻が存在していなかったことの証人である。実際、ガルが扱うこの同じ時期の記述に関して、カドゥベックの記述は著しい範囲において中断しているからである。一一一三年七月のボヘミア公ソビエスワフのポーランド訪問について、我が年代記は何も語っていないという点からみて、この年代記が書き記したすべての事柄はこの時点以前の出来事であったと思われる。

(一九九八年八月五日 稿了)